アニメ改変案集１

おだまきかこ

アニメ改変案集 1

はじめに

　世の中に出ているアニメ作品など、不満が残るものを一刀両断？せめてあらすじだけでもと、書き溜めたブログの記事を再編集しました。このような雑案が今後も増えないことを祈るばかりです。アニメ製作者のみなさま、ベストを尽くしてエースを狙うように、今後は努力してくださいませ！

2008年1月

おだまきかこ

目次

ボトムズ「死の墓標」１ …… 1
ボトムズ「死の墓標」２ …… 2
ボトムズ「死の墓標」３ …… 3
ボトムズ「死の墓標」４ …… 4
ボトムズ「死の墓標」５ …… 7
ボトムズ「死の墓標」６ …… 8
ボトムズ「死の墓標」７ …… 10
ボトムズ「死の墓標」８ …… 11
ボトムズ「死の墓標」９ …… 12
幕末維新伝いろはにほへと　１ …… 13
幕末維新伝いろはにほへと　２ …… 15
クラスターエッジ　１ …… 17
クラスターエッジ　２ …… 19
クラスターエッジ　３ …… 21
ガンダムＷＯＡＶ　１ …… 24
ガンダムＷＯＡＶ　２ …… 26
ガンダムＷＯＡＶ　３ …… 29
封神・瑞獣の城　１ …… 32
封神・瑞獣の城　２ …… 35
伊角の碁・はがゆい唇 …… 36
Ｖガンダム …… 39
サムライトルーパー・天空海闊 …… 43
ガサラキ・静かなる湖水のほとりにて …… 49
封神・瑞獣の城　３ …… 52
THE 八犬伝　婆沙羅 …… 55
DEATH NOTE 赤頭巾シリーズ１ …… 59

DEATH NOTE 赤頭巾シリーズ２ 61
DEATH NOTE 赤頭巾シリーズ３ 63
DEATH NOTE 赤頭巾シリーズ４ 65
DEATH NOTE 赤頭巾シリーズ５ 68
天空のエスカフローネ　ラヴァーズオンリー 72
ラーゼフォン　新しい歌 74
ガンダムWテレビ版 76
渡辺淳一「無影燈」改編案 80

ポトムズ「死の墓標」１

いきなりですが、今回は久し振りにボトムズです。李くんのドラマを見なければいけないんですが、先にあがってしまったので、これから書いてます。やはりあれはこうしたほうが良かったのではないか、という話をひとつだけ思いつきましたので、書いてみたいと思います。「かくやくたる異端」なんですけどもね、ボトムズの。

これタイトルあんまり好きじゃないので、勝手に変えさせてもらいました。ありがちなタイトルですみません。いつものことですが。なんか「氷点」の人の小説にこんなのあったなあと思うのですが。誰だっけ？えっとなんか病死ものだったっけな。うん。見たことないんだけど、「氷点」は。だからそういうことにしてみました。

で、いきなりあらすじですが、おおまかな骨組みは、未来の世界・・・・おそらくコールドスリープに入ってから100年先ぐらいがいいかもなあ。いや50年ぐらいにしておいたほうがいいのか・・・ココナやバニラも出て来るほうがいいかも知れません。うん、高橋監督の今連載中の小説は今はまったく読んでないんで悪いんですけどもね。うーん、やさしくない言い方だったかなあ。いやまとまって読みたいと思うから・・・。

まずとにかくゴウトはすでに故人です。最初に墓標、ゴウトここに眠るというのが書いてある。それはどんな言葉がいいかなあ。ギルガメス語がいいのか、違う言葉がいいのかわからないんですけど、とにかく字幕で「ブールーズゴウトここに眠

る」と白い文字で入れてください。墓標の下にね字幕で。それがあんまり長く写らない。で、キリコの手がなんかコップ、軍隊の鉄のコップだなあ。取ってはついていないほうがいいです。そのコップに水筒で水を注ぐ。死に水ですね。それで立ち上がって、背嚢を肩にゆすりあげて歩き出す。もちろん、無言です。砂がまじった風が吹いている砂漠か荒野みたいなところがいいですね。あんまりお花とかはいれないでください。ゴーっと風が渦巻いている音がCEでね入っててね。そこを歩いていくのは、最後まで写してください。ただ場面は切り替わったほうがいいけど、とにかく最後まで歩いているんだなあ、ってカンジです。砂漠をね。

ボトムズ「死の墓標」2

それ医療用のコップみたいなのですか？

もちろんですよ。水筒の先のヤツでもいいけどもね。あ、そうしたほうがいいか。とにかくそんな感じのコップですね。はい歯をゆすいでください、のときのコップ。まったくそんなコップをわしに差し出すのかキリコは。ゴウトはな。仕方ないじゃないかそういう話なんだから。そうだね。あ、私ココナだけど出て来るのかな？うん。出したいんだけど・・・。

で、どうなるの?>高橋

えーっ、昨日の晩聞き耳たてていたんじゃないの？もうあの通りだよ。「ブレードランナー」のまんまそのままっていうか。またふりだしのウドの街に戻ったねぇ、時間だけはたってるけど。そう、おまえ以外はなあ。な、何を言ってるんだ。

お、俺はただ若いだけだ。あは、めずらしくキリコが冗談を言ったよ。言えるくせにね。あれはわざと言わないんだよ。ココナはな。

　そんで深読みして読み返さないようにしながら話を先にすすめるとです、すぐに次の場面でウドの街の進化したみたいな町だね。街の名前も小さく出たほうがいいな字幕で。そんで上空からカメラがズームで降りていって、地上の町が写る。街は平面みたいなカンジのところがいいなあ。タワー部分はまだ写さないでください。どんなタワーの形がいいか、わかんないけど、あの「ブレードランナー」のダムの形でもいいと思いますよ。それだとそのままだけど。うーん、あっ、取水口みたいなカンジもいいかも知れませんね。なんかそんな感じですよ。ただし、すごくそれは巨大ね。李くんのドラマみたいにね。それでこう小さくビルの窓みたいに信号灯がチカチカしているんですよ。いろんなところにね。ただし、整列して。そうですそうです。まさにそれだなぁ。もちろん夜ですよ。東のほうにまだ、日暮れの光が残っているカンジです。うーん、カメラが横移動ね。そんな感じです。「ブレードランナー」のままだけどもね。

ボトムズ「死の墓標」３

　空には飛行機は飛んでるの？

　うん。飛んでるほうがいいかな。あのままだけどね。それで喧噪が写る。どっかのバトリングの会場です。そこを男が一人歩いている。それはキリコではありません。ネクスタントの一人です。「ブレードランナー」の最初のヤツみたいな、人相の

悪い中年の男です。それが足元だけ写るカンジ。また酸の雨が降っているところを、バチャバチャと、でも普通に歩いていく。それでケンカしている暴走族・・・・うん、でもそんなに若くないほうがいいです。オヤジが二人だね。「てめぇ、何を言ってんだよ、俺がよぉ」みたいなセリフを言って胸倉をつかんでいる片方が片方のね。で、「うるせぇ」とかやっているところへ、その男が通り掛るんです。そこで背がそいつらよりも高いことがわかる。で、「おまえがうるさい」って言って二人の頭をいきなりぶつけて死亡させるんです。で、おおっ、あいつはなんだ？みたいなカンジで周囲が少しだけどよめくんですけど、すぐに元に戻る。そんで平然と、でも普通にその男は歩いていく。それで、携帯電話をコートのポケットから取り出して、「〇〇だ。そっちの調子はどうだ？」って尋ねる。無線みたいな音が少し入って、「まあまあだ。〇〇の酒場の近くに新しいATがあるから取りに来い。臓器の調子はどうだ。」「俺はまだ大丈夫だ。」「そうか。俺もだ」って言って携帯電話を切る。

　はい、そこまでです。いったん保存してください。>高橋

ボトムズ「死の墓標」４

　それで次の場面は勝手にドラマが進んでるんだけど、

　ココナ「あんたもう閉店だよ。」って言ってアップダウンピアノのふたを閉める。まあ少しおばさんになってるけど、あまくけばくないようにしてください。バニラに初期設定のようにひげが生えてて、それでよっこらしょ、ってカンジになるのかなあ。スツールから立ち上がって、新聞をテーブルに置いてか

ら、店の前の電飾の看板。普通のスナックの、でも普通のよくある店のカンジ。むしろ喫茶店みたいに見えるようなのの電気を落とすんです。ちょっと腰を落として確認しながらのカンジでね。で、ココナがなんか「またうるさいねぇ。」って言って、暴走族の音がかすかにするんです。で、バタンと鎧戸、アーリーアメリカンの窓を開ける。よくある窓だけど。大きさはちゅうくらい。それでちょっと見回す。店の裏のどぶが写る。で、ココナがなんか小さなものを見つけて、はっと顔をゆがめてから店の外に出てかけよる。どぶの上に片方の目玉が、ゆらゆら漂っている目玉が落ちてる。ココナ「あんた、またこんなもの落ちてるよ。」バニラ「まったく世も末だな。キリコはあんな決意して棺桶の中に入ったのになあ」って二人でひそひそと言う。それで扉を閉める。目玉は拾ったほうがいいです。銀のトレーみたいな小さなお盆にのせてね。

いったん保存だ。>蒼紫　キリコ

その時のココナの服装はクメン編のときのものです。ただし羽は小さくね。それでバニラですけど、あのままだけど、メガネをかけているほうがいいのかな。丸めがね。鉄斑の。で、黄色い業務用のエプロンつけてる。バニラの服装は、上は深緑で、下は黒のズボン。そうね、よくあるマスターの服ね。ココナはネックレスしているの。そう、丸いネックレス。大きめのほうがいいかな。うん宇宙編のタマネギおばさんのしてたヤツで色は白いの。あ、クメン編のドラマでもしてたかな。で、上にちゃんちゃんこみたいに見える薄紫のボレロね。下はねぇー、何がいいかなあ、フリルはついてて、うんでも黒いカ

ンジがいいかな、黒のフリルのついた、左開きのマキシ風のドレス。ちいさくホックがついてるの上に。長袖がいいかなあ、白のシャツドレスで袖にフリルがクメン編のスカートみたいについてる。そんで、金の細い腕のネックレスつけてる。片腕にね。そんな感じ。

あ、さっきの最初の場面の二人のオヤジは、顔にマーキングとかしている顔じゃなくて、普通の競馬場にいるオッサンにしてください。一般人みたいなね。はい。ネクスタントも顔にマーキングとかしていない感じでいいです。

バニラたちのスナックは、もちろんクメン編の屋根付の一軒屋じゃないですよ。歓楽街の中、それのちょっとはずれたところにある小さなビルの一階です。二階と三階部分が住居になってる。コンクリートのビル。横のビルとの間はせまいの。そんな感じですよ。そ、新宿か渋谷のね。あ、梅田とか難波のかな。

あ、言い忘れていたけど、キリコの服はもちろん着たきりすずめですよ。あの服ね。髪の毛もあんまり青くない水色のままがいいなあ。無精ひげはないほうがいいなあ。まあ若いままなんですよあの人はね。うん、だけどなんか時間がたっていることを示すもの・・・腕時計つけていたかな、キリコって。スポーツマン時計？まあそんな感じのもの。つけないほうがいいのかも知れないけど、あったほうがこれからの作戦で必要な気がします。うん、そうだね。あとは「かくやく」のオープニングの通りにね。野営場面は、出したければオープニングの中で

出してください。でもなるべく出さないほうがいい気もします。微妙なところだね。夜も歩いている場面も出してください、その場合は。草原を。はい、その通りですね。>塩山紀夫
　そんな感じだと思います。うん。僕もそう思うんだ。なんか一瞬怒った人いるみたいだけどなあ・・・。あ、あなたに対してじゃないですよ。そ、そうなんですか。

　あの、続きはまだ考えてないから・・・・。はい・・・。>塩山紀夫

ボトムズ「死の墓標」５

　それでバニラたちの場面が続くんだけど
　バニラが裏通りを歩いている。夜です。用心しながらです。服装はエプロンははずしてください。時々息が切れながら走るカンジ。そんで、アパートの集合している広場の中の小さな教会の中に入る。あ、こないだ見た「ソイレント・グリーン」のまんまなんだけどねえ。あの映画終結部分は非常によかったから。はいはい。その教会の中に、難民があふれてるんです。バニラセリフ「なんとかここまでこれた。おいあんた、新しい目玉が入った。すぐに移植してくれ。」って言う。保存容器の中に目玉が何個か入っているんです。それでね。えぐい話なんだけど、中に臓器をとられちゃった人びとが「俺の体を戻してくれぇ～」ってうめいているんです。「痛い・・・痛い・・痛いよぉ・・・。」って泣いてる。そんで医者の青年、これは「かくやく」のバレンタインだったかなそんな感じの名前のキャラです。その人が医者ですね。はい。白い医師の服装していて、受け取る。バニラが「御代はいらないからな。」医者が「当た

り前だろ。」って言う。いやバニラらしいですねぇ。うん、それがバニラだ。で。医者は「あんたも五体満足を維持できるように用心しないとな。」って言う。バニラが「そっ、その通りだよ。しかし俺も歳だからなあ。」って汗を額の片手でぬぐって言うんです。

　そこでいったん保存だよ。＞キリコ

　なんか一人蹴った人がいるんだけど。

　俺に決まってるじゃないか。＞蒼紫
　邪魔をしない。＞ココナ
　俺たちのほうが先なんだからね～。＞バニラ

　そうです・・・・。＞高橋

ボトムズ「死の墓標」６

　で、オチを言ってくださいよ先に
　言ったほうがいいの？それ聞きたくない人もいるみたいなんだけど。いやオチを先に僕は聞きたいな。５人ぐらいのネクスタント、いや４人のほうがいいかも知れません。女が一人いたほうがいいのかなあ。ま、そんな感じでどうしても入れたかったら女の人も入れてね。テイタニアですけど、鬘は絶対にかぶらないでください。素のままでいいですから。そうっす。まさにその通りだ。で、そいつもその話でもう死んでしまうんですけど、まあいるってことでね。はい。一人顔にマーキングしているヤツ、それがボスです。まあ好きなカンジでメイクしてく

ださい。ま、カブキロックなカンジで。でも下はパンクです。全員パンクのままですから。絶対にあの中世の衣装はつけないように。そーだよねぇー。

　いったん保存だな。>蒼紫

　あいつやりたがっているんだなあ。それはもうそういう人ですからね。一発勝負？そうっす。でも蒼紫もいたほうがいいのかなあ。ま、補佐でいるといいうも知れません。で、ほかにガトーも入れてみてください。バトーかも知れませんがね。いやあ、いいなあ。黄金のメンバーだね。その中に囲まれている女はかこちゃんよ。そうだね・・・・。そういうことですね・・・。うん・・・。

　なんかそれ・・・・。いや、そういうドラマなんだよ。あのう・・・。まあそういうことで。そうだね～。
　で、オチ先に言えって言ったじゃないっすか。だからその道節が「俺はほしいんだよ!!! あのあんたのその生きのいい肝がよぅ!!!! 」ってなんか戦いの中でそういうことを言うんです。はい。で、女のほうは？「あたしはあんたみたいになりたかった・・・あたしも永遠の命が欲しかった・・・・。」って言いながら涙を流して死んでいくんです。ありがちですけどもね。で、フィアナの決めゼリフは、キリコの腕の中で「これで・・いいのよ・・・。私はずっとあなたと一緒に戦ってきたわ・・・でも私はPS・・・・そういうことだったのよ・・・・。」って言いながら死んでいくんです。だから道節のセリフで「50年もコールドスリープしていたら、どんな人間だって

体がいかれちまう。たとえPSでもな。でもPSにも保存期間が長そうなのもある。それは脳だ。あの女の脳をいただく。俺たちの女にな。」とか言うんです。「脳の情報は・・・。」「もちろん書き換えるさ。あんたのころとは違うんだ。初期状態に戻る。つまりあんたのことは忘れてしまうのさ。消去済みってことでな。」ってことでね・・・・・。

はい。そういうことでした。終ります・・・・・。

というか、フィアナさんの体はね、裸でいいですけど、顔は若いままなんですけど、体がめちゃめちゃな状態に腐敗しているんです。で、キリコがシーツをめくってね。うっ、という顔を一瞬してから、でも平静な顔で、大丈夫だ。頭は元のままだ、って言うんです。はい・・・。

そういうことでした～。終わります・・・・。

まあ・・・その・・・ナウシカのアスベルの妹みたいなカンジで・・・・・。

ボトムズ「死の墓標」7

で、その女に全員で一斉に顔を見せる？

そんなことにはならないと思うけどもちろんねーそんな感じでそういうことですが。だからなあ。これなんかいやです・・・。なんか・・・ヘンな世界が広がっているみたいやなあ。そのあと全員で殺しあうんですか。まあ、その戦いは闇に葬られたな。そういうことだった。あっ、そうだった。キリコが「俺

の体の寿命が長いのは、生まれつきじゃない。仕組まれたからだ。」って言うんです。まあそういうことでした。そうだね。キリコも時限爆弾を抱えているみたいなんですよ。はい。

　じゃ、オチ言いましたから。はい。>高橋和夫　高森和夫

　あ、そいつらももちろんATに乗ってますから。新型ですけど、なんかわかんないカンジで。

ボトムズ「死の墓標」8

　で、それを書くの？

　うん。仕方がないですね。はい。まあいったんフィアナが死んで？キリコが呆然としているところで、やつらがなぜか生き返るんです。で、おまえはどけっ!!ってカンジで押しのけて「まだ脳死段階じゃないからな。」って、死んだテイタニアに移植してしまうんです。キリコはもちろん死にそうなカンジになってます。そんで、道節さんが「まず俺の顔からだ」って言ってね、顔情報をIDカードみたいなカンジで、画面に出していく。で、その時床の上に倒れているキリコが、視界がぼやけそうになりながらも、ピストルの照準を合わせて、道節の頭を撃つんです。そんで他のが出て来るだけどもね、死闘を繰り広げて、全員倒すんです。そんで自分の顔情報を入れる。でもね、脳は死んでしまうんです。時間がかかりすぎてますからね。ピー・・・・・ってカンジで・・・。うわぁぁぁぁぁぁ!!!それっ、最高のドラマやぁぁぁぁぁ!!!ええなあ、それ!!!!

　だから一言で言って「ゴクウ」なんだけどさぁ・・・。うん

・・・・・。

　終わります・・・・。

　いや、未来はそんな社会になるかも知れないですね。臓器移植法案が可決されました？うんそれだね。なんか知らないけど、ニュースで聞いたから。それそれ。だからそのネタで転がしてみました。終わります。いや、ボケの問題も、認知症の問題も含んでますよ。いいドラマですね。ああ、そう言っていただけるとうれしいですよ。ボトムズには少しどぎつすぎる内容かも知れないと思って書いてたから。そうだね。嫌がる人もいるかも知れません。はいはい。うん、女の子はすねるねぇ。甘い世界じゃないですからね。ええ・・・・。

ボトムズ「死の墓標」９

　ああ隠し設定ですけど

　キリコですけど、あの人はコールドスリープに入る前にちゃんと写真で自分の顔を何枚か知らないけど、撮影しているんです。それを携帯しているんですよ、カードでね。運転免許証みたいにね。うんうん。お互いに写真を取り合ってから、眠りに入っているんですよ。で、フィアナの「私のはムダよ。意味なんて、ないのよ。」って声が響くんですよ。まあ完全に死んじゃった瞬間にね。キリコの脳裏にですが。で、その写真がインサートされるのかな。まあそんな感じですね。地にカードがばらっと落ちるんです。イメージシーンですが。そういうことですね。

終わります。

ああ、フィアナさんのヌード写真ですか？それは持っているでしょうね。最初からヌードだったからあの人は。まあ、フィアナさんを怒らせないように、椅子に座っている美術モデル風の写真だと思いますよ。そう願いたいね。うん、そんな感じでね。正面から撮った写真を一枚。いやそれを何枚も現像するのかも知れないですけど。あの人用心深いですからね。落とした場合のことも考えて。あっ、古いかも知れないこれは。データチップにもしてるかなあ。そんな感じだと思います。まあ古かったです。ごめんなさい。そういうことでした。じゃあね。

はいはい。

キリコは大人の男なんですね。うん。あの人そうだと思う。見た目は若いけどね。うん。明治時代ですか？うん・・・あれは一枚しかないから・・・まあ現像もできるという設定に無理矢理しましたけど。未来はいいね、ってことでね。やあこれは言い過ぎたかなあ。うん、ま、そういうことです。はーい。

幕末維新伝いろはにほへと　１

横浜港近くの岸壁の上。停泊している黒船が数隻見えている。カモメが飛んでいる。蒼紫登場。しばらく回想している。坂本竜馬の死に際のこと。と、腰の剣の名刀ムラサメを引き抜く。少し構えて、それから肩の力を抜いておさめる。地面を見つめながら。それから、岸壁の上から石段を降りていく。すれ違う、漁村の干し魚の束の荷を背負う老婆が一名。

　ここで、御一新の兵が江戸を目指している地図を入れるか？入れないほうがいいと思うが・・・。山岡鉄舟のエピソードは省略させていただく。

　横浜港の異人館街。少し商館が建っている手前。外人が三人ばかり歩いている。向こうから、ならず者が数名。木づくりのゴミ箱の物陰で「来た来た」と喜んでいるチュチュとハゲの子供。浪人すれ違いざま「今刀が触った」と外人を怒る。外人、「あなたたちは、この間切り殺したばかりなのに、またそんなことするネ」と、ピストルを構える。「撃つネ？撃つネ？」浪人「おう、撃ってみろよ!!!」そこへチュチュとハゲの子供がちょこまかと走り出す。チュチュ「やーい、屁っ放り腰のさむらいやーい」ハゲ「さむらいやーい」浪人と外人の間を走り回る。チュチュ「こっちの人たちは、赤鬼、赤鬼」外人たちとまどう。浪人激怒し、「そこへなおれ、ガキどもっ。貴様らから切り殺してやる!!!」

　そこへ蒼紫登場。全員峰打ちで倒す。チュチュ「すっごー」蒼紫「バカげたマネはもうよすんだな。」蒼紫刀をはらうと、鞘におさめて立ち去る。チュチュとハゲは顔を見合わせ、チュチュ「あいつ、ひきずりこまない？」ハゲ「最初っからそのつもりだったんだろう？」チュチュ「だって使えるよ、あいつ」二人で蒼紫を路地裏におびきよせる。迷路のような路地裏を出たり入ったりの鬼ごっこの要領で蒼紫を導く。蒼紫、気がつくと？一座の隠れ家の前に立っている。「いらっしゃいませ」と廊下に立っている口上の老人が丁寧に頭を下げる。中に入るとからくりで下に降りられる。

かくのじょうが登場。スポットライトで雪乃丈変化の芝居をしている。藤娘の傘で最初は顔を隠しながら、口上を述べる。
「いろはにほへと、ちりぬるを・・・・ういのおくやまけふこえて・・・あさきゆめみしえひもせず・・・・いろは四十七文字に秘められし我が恨み・・・・・そなたは果たして知りぬるを・・・？」
で、傘をあげてくるりと回ってから、お嬢吉座に芝居が変わり、ほかのメンバーの紹介の芝居に移る。ほかのメンバーの傘は緋色のもの。

幕末維新伝いろはにほへと　２

蒼紫黙って芝居を見ている。舞台に紹介が終ると明かりがついて、かくのじょうが気さくに話しかける。「おさむらいさん、凄腕みたいだね。あんたを雇いたいんだけど・・・ごらんの通りの貧乏所帯だから、そんなに払えないんだけど・・・・チョンの間十両でどう？」かくのじょう、傘を閉じて蒼紫に投げる。蒼紫受け止めて「似合わんな。無理をするな。」かくのじょう「食えない男ね。」蒼紫「俺も命は惜しいのでな。見ず知らずの貧乏一座のために捨てるほど、人がいいわけではない。帰るぞ。」かくのじょう、キリッと唇をひき結んで胸に右手を置いて叫ぶ。「なら、あたしを売る!!!今、ここで!!!」老人「お嬢・・・・。」青年「姐さん・・・・!!」蒼紫「高い買い物はしない主義なのでな。いい芝居を見せてもらった。」傘を壁に立てかけて階段をあがって立ち去って行く。

かくのじょう、楽屋で鏡に向かって紅を差している。幼い頃の回想。泣いている幼いおかっぱ頭の自分の姿。かくのじょう

唇の紅を差す。それから、目じりの紅を差して、ふっ、と寂しげに笑う。「泣いているみたいだ・・・。」と、ひとりごちる。その時一座の青年が登場。「〇〇屋のオークションで出されるのは、やはり覇者の首です。」かくのじょう「そう。やるしかないのね。いの一番。」仲間と一緒に中国風の建物の〇〇屋を下見に行く。かくのじょう「あれがお父さまの首だなんて、思いたくないのよ・・・。」老人「そうです。あれは、お父さまの首ではありません。」かくのじょう「でも、そうだわ!!!!私にとっては・・・。」と思いつめた顔で言う。

〇〇屋のオークション会場。かくのじょうは、落ち着いた母親風の羽織姿で登場する。ほかのメンバーも従えている。かくのじょうセリフ「〇〇屋さま、今日は覇者の首が出品されるとか・・・。わたくしにも見せていただけないかしら・・・？」〇〇屋「なんだこの女は。」「秘密オークションの入り値はいくらからかしら？教えていただけない？」「五万両だ。貴様に払えると思うのか。おい、この女をつまみ出せ!!!」そこでかくのじょうは忍び姿に変装。「いの一番!!やるよ!!!」と会場を大混乱に陥れる。

そこへ蒼紫が登場。覇者の首を切る。首はいくつもの人間の生首が縫い合わさって、巨大な鬼の形になったもの。丸箱から出されたときは、あたりを腐臭のガスがたちこめる。首は生きて？いて、それぞれいろんな方向を見ながら恨みのうめき声をあげている。呪術的意味合いのある品もの。その首は蒼紫にいったん斬られるが、哄笑を残して何処かへ飛んで行ってしま

う。かくのじょう、蒼紫に助けられて安堵はするものの、首の行方がわからなくなり、混乱してその場に倒れる。かくのじょうセリフ「あの中にお父さまの首が・・・・首が・・・・。」。気絶したかくのじょうを抱き起こす蒼紫。で、第一話は終。

あとがきの私のひとりごと→「デビルマン」のジンメンがなつかしいなあ～。あと紹介文だけで一度も読んだことないんですけど、泉鏡花の「義血侠血」って作品ね。この水芸している芸者？さんと御者の人。この感じで蒼紫とかくのじょうを描いてみました。

クラスターエッジ　１

おはよーございます。今日は気分を変えまして、「クラスター・エッジ」の第一話について考えてみたいと思います。この作品は最後まで視聴していませんし、一度しか見ていないのでお聞き苦しい点がたくさんあると思いますが、頭に浮かんだものを書いてみたいと思いました。皆さんよろしくお願いいたします。

最初に海岸沿いの画面が写る。蒸気機関車が走っている。中の食堂車にベリルが座っている。ナプキンをつけて、白い取り皿の上の肉料理のようなものをフォークでつついている。が、窓のほうを眺めている。回りの乗客が写る。落ち着いた服装、19世紀末イギリスの上流階級の貴婦人たちが座って紅茶を飲んでいる。セリフ「で、〇〇〇家の当主が今度決まるらしいで

すわよ。」「もしかして戦争が？」「まあ恐ろしい・・・。」でもどこか人事みたいなセリフ。年老いた白髪の給仕が向こうからナプキンを腕につけて歩いてきて、ベリルの前を通過して貴婦人たちの勺をする。ベリル立ち上がる。場面変わって廊下。それから、汽車の連結器の前のデッキ、天井のついたものの中でベリルがぼんやりと立って景色を眺めている。連結器の動く雑音。動いている連結器が少し写る。それから画面が切り替わってから、廊下に主人公のアゲート少年が廊下の向こうから何か水色のボールのようなものを追いかけて走ってくるのが写る。ベリル一瞬目をそらしてから、また見ると、廊下の客室に入る足が少しだけ見える。すぐに見えなくなる。少年がいない廊下が写る。

　展開。アゲート少年が廊下を歩いている足が写る。がらっと最終客室のドアを開く場面。青空が見える。後ろに荷台の客車がつながっている。天井はついていない。その数はいくつかある。アゲート少年、身軽にみっつぐらい飛び越してから、ひとつの荷台の上に乗る。そこでセリフ。「うまくいったな。」シートをめくるとハンドメイドの機械が折りたたまれて台車に格納されている。と、確認してから空に爆音。最初は小さく。空の上を吹き流すような灰色の煙が見える。アゲート、遭難した飛行機と見て、セリフなしですばやくシートをめくりあげる。機関車鉄橋にさしかかる。アゲート、よし、と確認してから鉄橋の上でハンドメイドの回転台を回転させて、翼を荷台の両横にひろげて、機関車からはみ出す形でハンドメイトを広げる。「うまくいくといいけど。」と、エンジン・・・紐式の旧式のエンジンをかける。バイクのような小さなエンジン。機関

車が長い鉄橋を渡り終える瞬間にハンドメイドで空に舞い上がる。

クラスターエッジ　2

　ハンドメイドでアゲート、遭難している飛行機に近づく。こちらはガス式のエンジン。小さく火を噴いている。アゲート、羽の下の後尾翼をパタパタさせて、信号を送るが、飛行機よろよろとガス欠のような動きで飛ぶ。アゲート目をこらす。中にパイロットがうつむいて乗っている。顔に白いネッカチーフのマスクをつけていているが、閉じかけている目が見える。アゲート必死でよせようとするが、そこへ五機ほどの爆撃機がまっすぐ編隊でＶ字の形で飛んでくる。十字の方向に交差する一瞬で爆撃される。アゲートのハンドメイトも爆撃を受けるが、まだ大丈夫な感じ。爆撃機は爆撃しながらそのまま向こうの上空へ飛んで行ってしまう。

　海の上にふたつの機体は落ちる。ガス式のカールスのものはばらばらになる。アゲートのハンドメイドはめらめら燃えている感じで海に墜落。海中のアゲート。ものすごい水の泡。アゲートの死にそうで苦しそうな表情。アゲート海岸にやがてたどりつく。水を吐き出すアゲート。膝に手をついて、下を向いてはあはあ言う。それから海岸を振り向く。日が落ちかけている。向こうから漂流している鉄板の上に、カールスの体がちょっと見える。奇跡的に助かっている。アゲート、走っていき、海岸へ打ち上げる。砂浜。アゲートカールスの体を背負いながらうつむいて歩いていく。カールスが少し動く。「大丈夫？」アゲートの明るいやさしい表情。カールス、答えずに首だ

けうんとうなずく。呆然とした脱力した表情。そのまま２人で砂浜の土手の上へあがっていく。カールスを背負ったままで。少し流木が落ちていて、雑草と小さな野の花が写る感じ。花は大きくなくて、水色系のもの。

　町。ベリルが蒸気機関車から降りている。夜。降車の手続きで、電灯の下で改札口で何か名前を書いている。通行人数名。それから道路・・・・最初は細い道、それからしばらくしてから大きな道路に通じる学園が写る。街路灯はあまり大きくないもの。「クラスター・Ｅ．Ａ」。学園のデザインはテレビのままだが、門はあまり装飾過多でないほうがいい。黒い鉄の格子。上にアールヌーボー調の華やかなデザインが少しついている。歩いて中に入っていくベリル。学園のドアの横の呼び鈴を押す。中から教師が一名現れる。普通の背の普通の会社員の部長みたいなおじさん。「やあ、君が〇〇家の次期当主のベリル君だね。話は聞いている。中に入りたまえ。」背をちょっと押すような感じで２人で中に入る。ドア閉まる。ドアはテレビのまま、家庭的なあの扉のままでいい。

　画面切り替わり、アゲートたちの打ち上げられた海岸の一番近い大きな町なみが写っている。古いヨーロッパの集合アパート。ただ、蒸気機関車の最終駅ということがはじめてここでわかる感じがいいかも？アゲートは２人で野戦病院みたいな建物に入っていく。この頃にはカールはだいぶ顔色がよくなってきている感じ。ぐったりとした感じではない。ロングで野戦病院の待合室が写る。人がごったがえしているが、殺気だった感じではない。２人で受付のところへ行き、パスポートを出し、名

前をアゲートが書く。「じゃ、お願いします。」看護婦に言う。

　翌日。アゲート、クラスター学園の門を、ちょっと咳払いをしてから得意げな顔でトントンとたたく。中から事務員みたいなメガネをかけたおじさん風の青年が現れる。アゲートセリフ「ここの学園のものです。中に入れてください。」メガネ「君が？冗談じゃない。帰りたまえ。」ドアをバタンとしめる。アゲート、失礼なやつだなという顔をする。服装は最初の白いシャツに釣りズボンのまま。アゲート、空を飛ぶマネで両手をひろげて中庭を「ぶーん」と言いながら走っていき、落ちていた一輪車に乗る。それからキコキコと庭をくるくる走り回る。今度は、最初のベリルの時にいたおじさんが、中庭のドアをバタンと開けて、「君、うるさいな。」と言う。アゲート、振り向いて、「僕は〇〇家の紹介でここへ来ました。これが正式な紹介状です。学園に入学させてください。」と言う。おじさん、けげんそうな顔をする。

クラスターエッジ　３

　学園の中に通されるアゲート。おじさん、ある部屋に案内する。コンコンとノックしてから、しばらく間を置いて、誰もいないことを確かめてから、部屋のドアを開ける。アゲートにおじさんは言う。「ではしばらくこの部屋にいなさい。あとで同室の者に案内させます。」と言う。アゲート、白シャツのタイを取る。それから首を回し、ベッドの上にボン、とお尻を投げ出す。「ここはいいところだな。」とぽつりと言う。腕を三角組みにして天井を見上げる。その時、廊下を歩いて来る音がし

て、ガチャっとフォンが入ってくる。フォンセリフ「あれ、君だれ？」「アゲート。」「アゲート？君なんか知らない。」アゲートがばっと起き上がり「僕この学園に今朝入学したんだ。」フォン「ええ、君がぁ？だって君まだ制服着てないじゃない。」「これから届くんだよ。」と言ってアゲート、ベッドから降りて部屋の中を歩き回る。フォンの蔵書が写る。生物学関係の本が多い。図鑑とか。アゲート、フォンを振り向いて、「ねぇ君、図書館に行かない？」フォン「図書館？」けげんな顔をする。

図書館に場面は切り替わる。縦に長い図書館。手前でベリルが本を読んでいる。本は黒い表紙の本。ピブリオ系のもの。と、頬杖をつき、横目でじっと考えこむ。奥の縦に長い本棚の間で、アゲートとフォンがはしごの書架の横で本を選んでいる。アゲート「流体力学の本なんだ。」フォン「流体力学？」アゲート「空を飛ぶのにいるんだよ。」フォン「へえ・・・・。」アゲート「羽の構造を見るのに見たくてさぁ・・・。あったあった。」赤藤色の表紙の本をちょっと背伸びして取り出す。アゲート、うれしそう。英語の文字の表紙。アゲート「あと、レオナルド・ダ・ヴィンチの羽車の絵も僕は見たいな。」フォン「いいけど君、時間中だよ。・・・授業に出なきゃ。」その時ベリルががたんと立ち上がって怒る。「君たち、静かにしないか。」

場面変わって野戦病院。夕方。病室のベッドでカールが寝ている。看護婦がカルテ表を持って、体温計を片手で振って言う。「平熱ですね。」やさしく「お大事に。」と言う。カー

ル、軽く頭を下げる。カール、ベッドの背にもたれて、ほっ、とため息。セリフ「生きてたんだ。」その時外の廊下-----緑の電灯のついた、古い廊下を軍人とその部下たちが歩いて来る。病室のドアをバタンと開ける。軍人「カール君だね。」カール、はっとする。軍人「君はクロム団を組織しただろう。それに、軍事機密の０００００の書類の箱の鍵を隠し持っているな。」カール、真っ青になるが、軍人が銃を取り出す前に、枕を投げつけて廊下に逃げ出す。逃走劇。「待て。」カール、必死に駆ける。外に古い自動車が置いてある。カール、エンジンをかけて逃走。あとから軍人たちの車が追ってくる。カールは山道に逃げ込む。でこぼこ道。カール、運転して小さな崖を飛ぶ。崩れそうな橋がある。カールそこを一気に車で駆ける。橋のロープがぎしぎしきしんでわたり終えたところで、切れる。橋が落ちる。軍人たちの車がそこで立ち往生する。

　カールそのまま山道を降りていくと、学園の裏手の丘陵地帯に出る。軽くバウンドして、少し飛ぶ形で車は緑の芝生の斜面を駆け下りる。そのままスピードが抑えられずに倉庫に突っ込む。中で模型を組み立て始めていたアゲートとフォンがびっくりして顔を見合す。急いで外に出る。車のクラクションがファー、と鳴っている。アゲート「さっきの人だ。」と言って助け起こす。フォン「誰その人？」アゲート「かわいそうな人だよ。大丈夫？」カールセリフ。怒ったようにうめきながらて言う。肩の傷を手でつかみながら。「飛ばなくっちゃ・・・飛ばなくっちゃ・・・みんなで飛ばなくっちゃいけないんだよ！！！」

---第一話　完------

ガンダムＷＯＡＶ　１

あのうこれタイトルの「エンドレスフルツ」ってのも変えたいんですけど・・・・。そうだね。何がいい？「サイレント・オービット」のほうがいいです。サブタイトルの。じゃそれで行ってください。

ガンダムＷ「サイレンス・オービット」

テレビ版の話の一年後。ヒイロたちはトレーズ亡き後の世界の戦後処理に追われていた。ミリアルドは姿を見せず、またあるときから五飛も彼らとは別行動をとり、雲隠れしてしまうようになる。ノインとサリィはヒイロたちとある科学物質の開発計画について、洗っていた。「ガンダニュウム合金をはるかに上回る、性質の科学物質・・・・？」サリィ「最後にミリアルドの機体に装備された物質ではないわ。これは合金自体が核融合反応をするものなの。」ノイン「核分裂も起こりうる・・・？」サリィ「もちろんね。太陽の近くで今実験をしているわ。Ｌ１コロニーの残った残存勢力の科学者たちみたいだけど・・・・。」ノイン「危険だ。除去しなければ。」サリィ「デュオとカトルに行って回収してもらうわ。」ノイン「ヒイロたちは？」サリィ「彼は使えるのよ。もっと大変な仕事をしてもらうわ。」ノイン「冷たい言い方だな。」ヒイロとトロワはサリィの命を受け、地球に下りて政治運動を監視していた。新しい連合の指導者が選挙で選ばれていた。当選会場の影から見守る二人。ヒイロ「民主的に指導者を選ぶ・・・地球も変わった。」

トロワ「それはどうだろうかな。オレはこれからXX研究所の施設にもぐりこむ。おまえはリリーナを監視しろ。」ヒイロ「リリーナをか。」トロワ「いやじゃないだろ。おまえもそのはずだ。」場面変わってリリーナが外交官として、会議に出席している。リリーナ、書類に目を通している。書類にサインをして調印するリリーナ。リリーナ「皆さん、ありがとうございます。わたくしのような若輩者がこのような任務を遂行できる・・・まことに、栄えあることだと思っております。わたくしはこれで、女王リリーナとしてのかつての権利をすべて放棄しました。トレーズが私に仕立てた仮の権利はすべてなくなりました。これからは一外交官として、新しい指導者にすべてをゆだねます。」席を立とうとするリリーナ。そこへハンカチでリリーナの口をふさぐ男が。抵抗するがリリーナ気絶する。窓の外で見ていたヒイロ、すばやく移動。が、銃撃を受け、助けることはできずいったん引き下がる。

　場面変わって牢獄の一室。そまつなコンクリートの床に後ろでにしばられてころがされたリリーナ。マリーメイアが付き人たちを従えて登場。マリーメイア「気がつきましたか、女王リリーナさま。いえ、リリーナ・ピースクラフト女王陛下。」リリーナ「違います。わたくしは今は、リリーナ・ドーリアンです。ピースクラフト財閥の権利はすべて放棄しました。」マリーメイアくすりと笑う。「財閥の権利？わたしはそんなものには興味はありません。わたしの名前はマリーメイア・クシュリナーダ。」リリーナ「クシュリナーダ？まさか、あの・・・。」マリーメイア「そう、わたくしの父親はトレーズ・クシュリナーダであります。わたくしの母上は地球連合の陰謀に

巻き込まれて殺されました。わたくしはその仇が討ちたい。父の仇もですけど。わたくしにはおじいさまの叔父上のデキム・バートンがついております。」リリーナ「バートン財団の？」マリーメイア「そういうことですの。あなたもバカね。ピースクラフト財閥はすべてバートン財団に吸収されました。」リリーナ「そ、そんなことって・・・!」マリーメイア「自己憐憫に浸っている場合ではありませんことよ。わたくしはあなたにやっていただきたいお芝居があります。」リリーナ「お芝居？またわたくしにお芝居をしろというの。」マリーメイア「ふふ。楽しいお芝居ですわ。全世界に中継されるのですから。」リリーナ「おやめなさい、そんなことは・・・・。」マリーメイア「黙りなさい、わたくしより目上のつもりで話しかけるのはおやめなさい。わたくしはマリーメイア・クシュリナーダであります。では女王陛下、またお伺いいたしますわ。」

ガンダムＷＯＡＶ　２

　デュオとカトルは太陽の近くの研究コロニーにたどりついていた。「すごい熱です」デュオ「こんだけ熱いから、新しい合金が作り出せるんだな。」カトル「それだけじゃないですよ。電磁波がここはすごいです。磁力線がきっと物質の融合に反応しているんですよ。物理で習わなかったですか？」デュオ「物理ぃ？知らねぇよ、俺はおまえと違って孤児院にいたんだからな。チェッ」カトル「あれですね。」デュオ「素体の金属か。」カトル「そういうことです。あれが量産体制に乗せられれば・・・・。」デュオとカトル、ガンダムで素体のポッドを回収する。途中、科学者たちを睡眠ガスで眠らせていく。カトル「デュオ、あなたは早く地球に戻ってください。この物質は

われわれが運びますから。」デュオ「わかった。」ラシードたちと回収船を航行させるカトル。デュオはガンダムを乗せたロケットを分離させて、地球に戻る。

　地球ではマリーメイアの軍隊が、地球連合の指導者を銃殺して制圧をはじめていた。とまどう人々。街の中をモビルスーツが徘徊をはじめる。やがて火の手があがる。人民たちの一人が、叫び出す。「マリーメイアは帰れー!!!」デモが起こり始める。不安な世相。ドロシー「みなさんが立ち上がるのなら、わたしは手を貸しますわ。」トレーラーに積んだ銃を人々に渡すドロシー。「さあ、戦いなさい・・・・立ち上がるのです。連合のみなさん、そしてマリーメイア。わたくしは戦争がやはり大好き。抵抗する人民は美しいわ。リリーナさま・・・あなたはどんな風に抵抗なさるかしら。」戦いに酔うドロシーなのであった。

　テレビ台に正装して立つマリーメイアとリリーナ。リリーナはクィーン・リリーナのドレスをつけて座らされている。テレビに写るのを見て、どよめく人民。「あのクィーン・リリーナがマリーメイアの隣に・・・・。」マリーメイア「みなさんにお知らせしたいことがあります。わたくしとリリーナ・ピースクラフト殿下は協定を結びました。永遠に、この世界から戦争というものをなくすという平和調停です。世界はこれから、わたくしマリーメイアの支配下に置かれることになります。」リリーナに握手を求めるマリーメイア。マリーメイア「さあ、わたくしと握手して。」リリーナ、おびえた顔で周囲を見回す。銃口が自分を狙っているのが見える。もちろんそれはテレビ画

面には映っていない。と、ヒイロの影を見たようにリリーナは思う。リリーナ決断した顔で、マリーメイアの手をはらいのける。「いやです。わたくしは、あなたとは握手をしません。」マリーメイア「なんですって。」リリーナマイクを奪い、「みなさん、恐れてはなりません。そして、勇気を出すのです。マリーメイアは間違っています。」マリーメイア「その女を撃ち殺しなさい!!!」リリーナをその時、かばってヒイロが飛び出す。

　銃撃の嵐の中をリリーナを抱きかかえて走るヒイロ。テレビ局の窓を突き破って逃げきる。ヒイロ、安全なところにまで行き、ノインにリリーナを渡す。「ガンダムで出る。」ノイン「行くのか。」ヒイロ「やつらも出てくるはずだ。」新型のモビルスーツが出てくる。戦うヒイロとデュオ。ヒイロ「こいつらは本命じゃない。」と、その時上空に黒い点のようなものが見え出す。人々「なんだあれは・・・。」「なんだかどんどん大きくなるぞ。」「コロニーじゃないのか？しかし大きくなっていくスピードが速い・・・。」

　と、その時マリーメイアの隣にデキムが立つ。デキム「待たせたな、諸君。抵抗をやめて銃を捨てるのだ。あれはコロニーではない。モビルアーマーでもモビルスーツでもない。そう、それら両方をあわせたものだ。」巨大な塊のような鉄の塊・・・しかしロボットのような、人工衛星のようなものが下りてくる。多宝塔をつけた人工衛星の戦車である。デキム「周回軌道に乗せた。これから休みなく、あれが諸君の頭上を回り続ける。しかも一体ではないぞ。」ミサイルが地上に発射される。

人民「い、いやだ。やめてくれ!!!」

ガンダムＷＯＡＶ　３

　カトル「間に合わない。僕は、ガンダムで出ます。」ラシードたちから離れて、ガンダムで出るカトル。と、その時赤いモビルスーツがカトルの横に出てくる。カトル「まさか、ミリアルドさん・・・？」ミリアルド「トレーズの忘れ形見があやまった方向に世界を導こうとしている。私も阻止したいのだ。」カトル、喜ぶ。地球に降下する人工衛星群を止めようと、ミサイルを撃ちまくる二人。ミリアルド「ダメだ、降下するスピードが速すぎる。それに数も多い。」カトル「いったいどうすればいいんでしょうか。」

　その時、五飛があぶないカトルを助けてガンダムで出てくる。五飛「ばかもの、こんなもの押し出せばいいのだ!!」ミリアルド「あぶないぞ!!!」カトル「なぜ今まで姿をくらましていたんですか。」五飛「俺はトレーズを倒せなかった。トレーズを倒したのはヒイロだ。俺は、最低の男だ。だから、今度はマリーメイアを・・・・。」カトル「そんなこと言ってる場合じゃないでしょう。それにマリーメイアはまだ子供ですよ?!」五飛「子供だからこそ、許せんのだ。俺のコロニーはトレーズに制圧された。あんな子供がまた出てくる。俺はあの一族を・・・。」カトルたちから離れて一人行こうとする五飛。呼び止めるカトルだが、行ってしまう。

　と、その時、ヒイロのガンダムが出てきて、巨大なバスターライフルをかまえる。トロワが援護しながら、二人であがる。

デキム「そんなもので・・・・・。私の合金は優秀だ。素体は使えなかったが、すべての機体に実験体が使われている。それに、少しかすめただけで、核爆発を起こすぞ。どうするつもりかな？」ヒイロ「その実験は確かなのか。」デキム「なに？」ヒイロ、バスターミサイルで横になぎ払う。五飛「ばっ、ばかな?! よけいに落ちるぞ。」ヒイロ「安定した周回軌道からはずれたな。」デキム「なに？」トロワ「ロシュの限界を越えた・・・・あの大きさでは・・・。」次々と自壊していく機体群。デキム「爆発しない?! そんなバカな?!」トロワ「地上のXX研究所のデータの実験データは、抜け落ちていたのだ。俺が改ざんした。」デキム、マリーメイアと逃げ出す。地下坑道を走る二人。と、サリィ・ポォとノインとリリーナが立っている。

　サリィ「お帰りなさい、マリーメイア。あなたのお母さまのことで話があります。あなたのお母さまを殺したのは、地球連合ではないの。ここに、証拠があるわ。デキム・バートン。あなたはバートンではないわね。バートンというのは偽名よ。」マリーメイア「えっ。」サリィ「バートン家はもうないのよ。あるのはクュリナーダの一族だけ・・・架空の名前ね。その男はクシュリナーダの側近だった男です。他人よ。あなたはだまされていたの。あなたのお母さまを殺したのはね・・・・お父さまなのよ。」DNA判定の結果を見せるサリィ。マリーメイア「うそ・・・うそ・・・うそよ・・・。こんなDNA判定の結果なんか・・・!!!」サリィ「悲しいシナリオね。そうでしょう、レディ・アン。あなたが仕組んだことね。」物陰から出てくるレディ・アン。アン「私はトレーズさまの一番になり

たかった・・・トレーズさまも、わたしが一番と言ってくださいました。マリーメイアの母親は私が殺しました。だってそうでしょう、私が一番だわ。そしてこの娘が今宇宙の一番になるの。」リリーナ「狂って・・・・。」マリーメイア恐怖に震えて「わ・・・わたくしは間違ってました。おかあさま・・・私はこれからは、宇宙の一員として。」デキム「そうはさせん。」マリーメイアの頭を撃とうとするデキム。その頭をヒイロが撃ち抜く。リリーナ「ヒイロ!!!」レディ・アンも撃とうとするヒイロの前に立ちはだかるリリーナ。リリーナ「撃たないであげてください。せめて・・・女の人です・・・・。」ヒイロ「しかし。」ノイン「人は変わってゆく。それに、いつまでもレディ・アンに追従するほど人は愚かではない。」サリィ「ごめんなさい。」呆然と立つレディ・アンの頬をぶつサリィ。サリィ「あなたの死んだ愛する男の忘れ形見を守ろうとする意志は美しいわ。だけど、間違った信念なのよ。もう目をさましなさい。」去ってゆくヒイロたちとマリーメイア。レディ・アン「なぜ・・・なぜなの・・・何が間違っていたの？なぜトレーズさまは私よりもあの女を・・・!」一人取り残されて慟哭する。

後日談。ミリアルドとノインは結婚して火星に飛び立った。その打ち上げロケットを見上げるサリィ。「火星のテラフォーミング計画はどうなるかしらね。うまくいけばいいんだけど・・・。」デュオ「あんたもそうしていたら、今におばんになるぜ。」サリィ「ガキはナマ意気言わないの。」頭をこづく。砂漠のジープに乗り込むサリィ。五人の少年たちが乗っている。ジープは砂埃をあげて、遠ざかって行く。

ーーー完ーーーー

リリーナとヒイロが最後一緒にいたほうがよかったかなあー。

◆補足事項

サリィのセリフ以下に変更。

サリィ「あなたのお母さまの殺人事件を調べさせてもらったの。古い事件だったわ。お母さまの住んでいた高層アパートに残っていた血痕はＤＮＡ判定の結果、あなたのお父さまのものと確認されました。ここに、そのデータがあります。」
以下、デキムが他人だったことは同じに。サリィの持っている資料は警察の公式風のものに。

マリーメイア対リリーナの最初のシーンのセリフ、リリーナの「バートン財団の？」これは「バートン？」だけにしたほうがいいのか？テレビ版のバートン財団の設定も改変しないとダメか？

封神・瑞獣の城　１

でね、昨日さんざんおどかされたから、伯邑考ちゃんが妲己を押し倒すまでを書くね。これコミック版だと「こらえろ。これが妲己の・・・。」とかやってるんだけど、アレ、うそっぱちだから。そうね、アニメ版で妲己のぶりんぶりんの胸を押しつぶしているほうが、まだ事実に近かったみたいね。

　そんでねー、妲己はマイ設定ではあのブスなままの妲己なんだけど、それだとちょっと事実とは違うから「夜叉姫伝」の秀蘭ね。あの娘の乱交場面のすえみ画伯の絵のヤツ。これなんですよ。このカンジの娘らしいの。そんで、後室でその頃紂王は姜妃めとっていて、妲己はなんか後室の廊下の隅の部屋をあてがわれていたらしいのね。廊下のつきあたりかな。とにかく、仲間はずれっぽい部屋。父の帝乙のお手つきなんでね。ごめんいったん保存するね。

　そんでまずいったんは姜妃に呼ばれたらしくて、そこは安能務の「封神」と同じで、そこで姜妃と琴の合奏をしたらしいんですよ。伯邑考。どうも姜妃はやってるうちに「ねえん・・・伯邑考」ってカンジになってきて、伯邑考が肩におかれた手を無言ではらいのけたら「こんなに綺麗なあたしの何処がダメだって言うの?!男なんて・・・・・!!!!!」って一人で秋波を発していたようです。どうも紂王ともそんなカンジでね。熱いトタン屋根の上のネコというカンジです。私ゃこの本読んだことないんだけど、話に聞いていたらそんなカンジで。まあるろ剣で言えば恵さんみたいな女ですよ。ただし、もっとすごいですがね。

　でまあ伯邑考ちゃんも魔がさしたんでしょうなあ。なんちゅうか、遠い昔殷に来た時の子供の頃に見た、あの娘まだ元気かな、とか思ったんでしょうな。まあ渡り廊下で小間使いの身に落とされているのを見てね、そんで姜妃に火をつけられちゃったので、その翌日かそのもっと翌日か知りませんが夜、人々が寝静まってから、その廊下の突き当たりの部屋の前に立っ

ちゃったんですよ。またこの部屋がねー、入り口が御簾がかけられているだけで、「誰でもどうぞ」状態なんですよ。姜妃の陰謀でそうなってます。そんで妲己が、前の日なんかまた姜妃の嫌がらせを受けて、一人でろうそくだけ灯してシクシク泣いていたら、なんかいるんですよ。そう、伯邑考がね。最初足だけ立っているのが見えてね。妲己飛び上がらんばかりになる。誰か来たーって。そしたら御簾をあげて入ってくるわけ。まあ色男がです。そんで「覚えていませんか？昔紂王と一緒に遊んだこともある・・・。」とか言うわけ。妲己はうわあ、って思っているんだけど、なんか物腰が物静かなんで油断しちゃったんですよ。その上顔もいいし。そんでおどおどしているところを、琴を弾いてあなたを慰めてあげますよ、って言って演奏を始めるのね。まあ大河ドラマの「新平家物語」のオープニングみたいなヤツを弾くわけよ。妲己ちゃん引き込まれちゃって、「綺麗な音色・・・・。」とか思っちゃう。そんで一曲弾いたあとですかね、「今度はあなたがどうぞ」って伯邑考が譲るわけ。妲己ちゃん真っ赤になって、「えー、そんなあなたの後になんて弾けません」って言ってるのを、なんか練習曲を弾くように持っていくのね。どうもその前日かぐらいに、紂王と姜妃たちと妲己ちゃん、演奏会に出たらしいんですよ。後室の女を集めての大演奏会。企画は姜妃なんだけどもね。まあ大半は父帝乙の女だったらしいですけど。おばば軍団の中では妲己は目立っていたのかも知れません。そんでこれは姜妃が伯邑考を釣るためのエサだったんだけど、邑考は別のところに食いついた。

封神・瑞獣の城　２

　そんで伯邑考ちゃんは妲己のお琴を聴いているうちに、やっぱりたまらなくなりまして、「今度は二重奏で演奏」とか言って、横に座るのね。そんで演奏しているうちにやだなあ、なんかそばに寄ってくるよこの人・・・・って妲己が思った瞬間に押し倒していたらしいです。「あなたの琴を私に聞かせてください」とか言ったとか言わなかったとか。言ったのか。そんでいった後、紙切れを渡しまして、「明日の晩この門に一人で来てください。一緒に僕の国に逃げましょう。」って言ったらしいんですよ。妲己は気が動転しちゃってて、震え続けてるのね。そんで翌日。

　さあ、ワシはこれから国に帰るぞ、って姫昌と伯邑考が雁首そろえて、朝の朝貢に出ているわけ。妲己は得意そうな伯邑考の顔を見ているうちに、だんだん気分が悪くなって、後室づきの女たちにかかえられる。姜妃がそれを見て、なんか気づく。そんで紂王もすぐに気づくわけ。「待て」っていきなり言って、伯邑考を閉獄する、姫昌は邑に留め置く、っていきなり命令するわけ。家臣団は大騒ぎになる。陛下は気が狂ったかーってなモンで。今周を怒らせてはなりませぬ、って言っているのを、うるさい、って虎の一喝して、夜伯邑考のつながれている牢屋に紂王は行くわけ。そんで「おまえは妲己の部屋に行ったな」「行ってない」「いや行った」「貴様はなんでそう思うんだ」「夜半すぎに琴の音が聞こえた」「・・・・。」「顔にそう書いてあるんだよ。貴様はオレが特別な死刑にしてやる。」ってことで炮烙の刑の第一号にしたらしいです。そんで焼けたのを姫昌に食べさせたという有様だったらしいです。

　で、その後姜妃が「やっぱりあなたはあの娘が好きなのね。こんな綺麗なあたしの何処がダメだっていうの?!」ってヒステリーを黄妃と二人で起こしまして、紂王に欄干から突き落とされたりしたらしいです。そんで黄比古は殷を逃げ出して、周側につきまして、聞仲は「陛下、貴様というヤツは～～～・オレはおまえの母ちゃんには片思いのままだったのに。おまえはただの受けなんだよ」ということで、激しく衝突しまして、紂王から「もう顔も見たくないよ」ということで、北の大地で背後から石を頭にぶつけられまして、死亡したらしいです。聞仲の遺言は「あんなバカ殿・・・・・。」
　ということらしかったです。

伊角の碁・はがゆい唇

　小畑さんネタでもうひとつ投稿しておこうと思います。
　今回はヤオイネタなので、嫌な人はスクロールして、読まないように願います。
　いや、ボトムズの同人で私がいぢめられた人のサイトがあるんですが、そこが激しく「ヒカ碁」でヤオイをやっておられるんですよねー。私は時々見に行っているんですが・・・私の場合、もとの原作の設定を生かしたものを書くことが多いので、見ていて、「歯がゆい」と思うんですよ。「歯がゆいのよ～その唇　キスする場所～間違えてる　心の傷なら　そんなとこにない」って感じですかね。高橋真梨子さんの「歯がゆい唇」、私この歌大好きなんですが。「眠れない夜をかぞえて」の主題曲です。このドラマはもう何度も書いていますが、永久保存させていただいております。ということで、私ならこうヤオるというものをちょっと考えてみました。もともとあんまりヤオイ

は好きでないんですが、書いてみようと思います。

　あらすじ→神童であるという誉れの高い塔矢アキラはあるとき、囲碁会館に伊角に呼び出されて、強引に犯されてしまう。「君の才能はすごいものだね・・・どこからその才能はうまれるんだい？」伊角が行為の時ささやいた言葉が、アキラの心を苦しめる。あいつは僕より碁が下手なくせに、僕の体を汚した。その記憶と羞恥心に耐えながら、アキラは大人の対戦相手と必死で碁を打つ。時間との戦い、しかしひらめいて碁石を打てた時、その碁板のしたに、伊角の悲しそうな顔が見える。僕は―どうして―あいつの顔が目に浮かぶんだろう。アキラにはわからなかった。

　アキラはライバルのヒカルに、何か霊のようなものがとりついているとおぼろげに知っていた。しかもその霊に助けられながら、のんきそうに明るく碁を打つ姿に、あるときアキラの怒りが爆発してしまう。「君は、僕がどんな気持ちで碁を打っているのか、わかっていない」涙ながらにヒカルを押し倒すアキラ。「あっ、そんなとこよせよ、やめろよう。」ヒカルの尻を犯そうとするアキラだが、うまくいかずただ痛いだけに終わる。ヒカルも感じなかったようだ。しかしこの様子を見ていた、佐為の激しい怒りを買ってしまう。「ヒカル、私のヒカル、その子供から逃げるのです～～～あああ、私のヒカルが汚されてしまった・・・・。」泣く佐為。佐為も実は、平安時代に犯されたことがあった。佐為から勝利を無理やり汚い手で奪った男に、押し倒されたのである。その記憶は、佐為の怨念のひとつであったのである。

佐為は怨霊となって、はじめはアキラに取り付いていたが、すぐに原因は伊角だと気がつき、（伊角は最初の行為から後はアキラに手を出していない）、伊角の枕元に取り付く。「私のヒカルをよくも汚しましたね」ということで、霊体で犯すのだが、何回かの行為の後、伊角に逆に下から首をつかまれて締め上げられる。「あっ、何をするのです。」伊角は、佐為に言う。「オレもおまえと同じだ。」佐為はいったん退散するが、今度は伊角に碁の指導霊として取り付くことに決める。「その隅に石を置きなさい。」わざと邪魔をして、間違った石を教える佐為。しかし、伊角は正しい石を置く。愕然とする佐為。「この者・・・ひょっとして、才能を秘めているのかも知れない。私はやはり、ヒカルのもとに戻ろう。」佐為がいなくなった部屋で、伊角は「さびしくなったな。」と苦笑する。

その後時間がたち、伊角は囲碁界入りを果たした。アキラも囲碁師になるが、アキラは名士になっているのに比べて、伊角には暗い影の噂がつきまとっていた。あるとき、アキラは「もういいだろう」と思い、伊角に体を開く。「僕ももう大人ですよ。」「そうだな。」行為のあと、そう言うアキラに、伊角は遠い目をして答えるのだった。夜の高架橋の上で、タバコの火をつけあう黒のスーツ姿の伊角とアキラ。「僕はタバコは嫌いです。あなたとの最初の時を思い出すから。」「ならなぜ吸うんだ。」「忘れたくないからですよ。」タバコを消して、立ち去る伊角。ひとり夜の闇に消えていく。

実は、伊角は幼いときにアキラの父に一度犯されていたのだ。しかし伊角はアキラには、そのことを告げないつもりでい

たが、伊角の体は病魔に蝕まれ始めていた。病室に訪れたアキラに、病床で伊角はそれを告げる。驚愕するアキラ。伊角はそんなアキラに、父を責めてはならないと言う。「君の父からの重責に苦しんで碁を打っている姿に、ひかれたのだ。決して君の父に犯されたせいではない。」「伊角さん！でも本当はくやしかったんでしょう。」「アキラ・・・・君を・・・・本当に愛していた・・・・・。」「僕もですよ。僕も伊角さんのこと、今では本当に心から愛しています。」細くなった伊角の腕を握りしめて泣くアキラ。伊角はある冬の寒い朝、息をひきとる。あの桜の舞う季節の中での囲碁会館の出来事は、永遠になった。アキラは伊角の言葉を胸に、ついに父行洋を超える棋士となった。

うん、こういうあらすじですね。「ヒカ碁」で考えると私の場合こうなるなあ。まあどうでもいいですけどもね。しかし・・・・対抗心燃やして書きましたけど、私もバカなことやってんなあ。グランドロマン形式のヤオイですよ、しかし、私の場合は。

それでは。

はがゆい唇

Ｖガンダム

さて、本日のお題は「Ｖガンダム」です。もうこの作品については、破天荒なキャラ・カテジナ・ルースのおかげで悪夢を見る思いでした。しかも彼女、「トルーパー」のナスティ柳生

に似ているんですよねー。逢坂さん、あんなデザインをして塩山さんは何も思わなかったんでしょうかね。ほんとにアニメアール出身者というのは・・・。塩山さんも「Ｖガンダム」は原画で参加しておられるようですが。まあそんな感じで、今日も「あそこをなんとかしろ」シリーズであります。とりあえず、小説版も参考に、カテジナのキャラをセイラさんみたいに変えてみます。

　あらすじ→カテジナはウッソとパソコン通信をしていた。ウッソは自分の年齢を 18 歳と偽り、偽名で大学生と名乗り、カテジナと学術論文について話し合っていたのである。ある時カテジナは「渡したい本があります」とメールで言われて公園に呼び出されて、ウッソに盗撮写真を撮られてしまう。しかしカテジナはそれを知らないでいた。カテジナはパソコン通信の相手を、本当に自分と同年齢の素敵な男性であると思い込んでいたのであった。「大変なご家庭なのですね。いつかあなたを助けに行きます。」カテジナはその文面を読むと、たとえ嘘でもうれしくなるのだった。カテジナの家庭は、母親が男と逃げ出していて、父は厳格だが小心な男だったのである。しがない街のパン屋の娘で私は終わるんだわ。ベッドでため息をつくカテジナ。しかし戦争の足音はすぐそこまで迫っていた。

　カテジナに憧れているウッソは、偶然手に入れたガンダムで幼馴染のシャクティを守って、戦っていた。しかしカテジナの住む町を守りきれずに、空襲を許してしまう。侵攻してきたのはクロノクルの部隊であった。カテジナははじめはリガ・ミリティアの中に保護されていた。赤ん坊の世話がうまくできない

シャクティに、「学校の実習で習ったことがあるの」と言っておむつのかえかたなどを教えるカテジナ。しかし、ウッソのガンダムを地上から援護射撃しているところを爆撃を受け、クロノクルの手に落ちてしまう。カテジナとクロノクルの運命の出会い、爆撃を受けて傷を負ったカテジナのスカートをめくろうとする兵士をなぐったことから、カテジナはクロノクルのことが、男として好きになる。しかし捕虜なので、敵に心を許してはいけないと思う。クロノクルは、カテジナが気丈な娘であると見て、自分だけのものにしたいと考えるが、戦局がそれを許さない。上層部につながるファラ・グリフォンからの命令で、自分の部隊の戦闘員になんとか配備するようにする。「いつも私のそばにいてくれよ。」カテジナは、クロノクルにひかれてはいるのだが、そういう戦争の指揮官としてのクロノクルは嫌いだと考える。どうして、この人は戦おうとするの？ついにモビルスーツに乗せられるカテジナ、はじめての戦闘で巨大なビーム砲の発射を援護するように言われ、敵（ジェンコ・ジュンコ）を、ライフルで撃つようにクロノクルに命令される。「撃てーっ」「いやです！」「撃たなければ君も死ぬんだぞ！」涙を流しながら、ライフルを撃つカテジナ。敵を撃った衝撃で体の振るえが止まらない。カテジナはパイロット席で肩を震わせて嗚咽するのだった。

　戦局は拡大し、カテジナは何度かウッソとすれ違う。「僕は、あなたの写真を持っているんです！カテジナならそんなことはしないはずだ！」ウッソとクロノクルにはさまれて、苦悩するカテジナ。カテジナはクロノクルの姉のマリアの唱える、マリア主義の人道主義にはひかれるものを感じるが、マリアの

「弟のために戦ってあげてください。弟は立派な戦士なのです」という言葉に、声を失ってしまう。マリアもまた、宗教にとりつかれた人間であった。これ以上私は誰とも戦いたくない。カテジナは組織の中で絶望していく。次第に敗色が濃くなってくるザンスカールの中で、クロノクルは次第に追い詰められていく。「私のそばにずっといてくれ」土下座に近い頼み方をするクロノクルに、カテジナは運命を享受した顔で静かにうなずく。ついに、カテジナの心は狂気の淵を歩み始める。クロノクルが問いかけても、自分の世界に閉じこもって答えないようになる。「そう・・・・シャクティの赤ちゃん、かわいいわね・・・。」虚空に向かって、独り言を語りかけるカテジナ。最後の戦局の時、オデロを討ったクロノクルを、ウッソに殺されてしまい、カテジナの繊細な心はガラスのように割れてしまう。「ウッソ君・・・・これでいいのよ。」パイロット席から出て、対峙するウッソとカテジナ。カテジナは自分の頭をピストルで撃ちぬく。ウッソの目に、一番綺麗な顔のカテジナ・ルースが飛び込んでくる。「カテジナさん、どうして死んだんですか!」カテジナの死体は、ウッソの手をすり抜けて、はるか上空から地上に落ちてしまう。「カテジナさん!」ウッソは最後の選択をし、敵将フォンセ・カガチの首を取り、シャクティと故郷に帰還を果たす。故郷の地でウッソは戦死した仲間たちのとは別に、小さな墓を立てる。「カテジナさんのお墓ね。」シャクテイの言葉に、ウッソはその場に泣き崩れる。「カテジナさん・・・ごめんなさい・・・でも僕は、いつでもカテジナさんにそばにいてほしいから・・・。」雪が空から静かに降ってきて、カテジナとクロノクルの墓の上に今はゆっくりと降り積もる。

まあこんなもんでしょうか。しかしこれは「これはああなってない」という
レベルの問題じゃないですよ。書きながら、鼻水が出てきましたし。自分の書いた名文に酔ってしまいそう？まあそんな感じですよ。こんな小学生の書くような作文ですがね、私ゃこうなったほうが良かったと思ってますよ。ええ。「Ｖガンダム」、なんでこうなってないの。知らんよわしゃもう。

それでは。

サムライトルーパー・天空海闊

うーん・・・「Ｖガンダム」が書けたんなら、「トルーパー」書いてみせてよね、と富野の幻聴を感じましたので、書くことにします。この作品はヤオイですので、嫌いな方はスクロールして読まないように願います。しかしあれはややこしい設定にしていましたからねぇ・・・・今ぱーっと書けるかなあ。

あらすじ→山梨県の片田舎に住む真田遼は、不思議な夢を見て、戦士の一員であるというお告げを聞き、宝珠を持つようになっていた。同様に夢の中で４人の戦士であるという仲間と会い、アラゴと戦う運命にあるのだということを、理解はするもののなぜ俺がと思って学校生活をすごしていた。

ある時、遼は仲間の戦士の羽柴当麻に兵庫県の片田舎の地方（子午線が通っている場所）に呼び出される。そこの蔵にしまってある古い戦国時代の絵巻物を見て、おかしくなった当麻

に遼は強引に犯されてしまう。ショックを受ける遼だが、「思い出さないのか」という当麻の言葉に、遼の心は揺れ動くのだった。その絵巻物は昔、当麻が描いたものだと言う。お互いに気まずいまま別れた二人だが、アラゴが本格的に新宿に攻めてきた折に、再会を果たすのだった。しかし当麻は仲間の前では、遼を犯したことを微塵も見せないので、遼は自分にやさしい伸のほうにひかれる。当麻は征士とペアを組んで出撃するようになる。

　いったん日本全国に飛ばされた４人、また再会を果たすことができたのだが、
　当麻だけ衛星軌道まで飛ばされていた。決死の覚悟で当麻を助ける遼。自分が攻撃を受けて死んだと思ったとき、前世の遼の幻影があらわれて、当麻を助けてほしいという声を遼は聞く。遼が「オレはおまえじゃない。おまえの代わりになんかなれない。」と言うと、幻影はさびしそうにかき消える。それは、遼の鎧に残っていた、前の使用者の遼の残留思念だった。よみがえった当麻は、敵魔将に激しい敵意をぶつけ、いきなり敵の急所を狙って弓を討つ。遼はその隠されていた当麻の姿に衝撃を受けるのだった。

　実は当麻は５人の中の真の刺客であり、かつてカオスの直弟子であった。二人は地球を時空犯罪者から監視していて、アラゴのように歴史を書き換えて暴れまわる犯罪者を、その星の住人のふりをしながら倒すという旅を続けていたのだ。当麻は戦国時代に遼の前世の姿の者に会っていて、遼を愛したのだが、こんなやさしい現地の人間に戦いをさせなければいけないとい

う自責の念から、うまくいかず、実際アラゴ攻略戦も失敗し、遼を失ってしまっていたのだ。遼を無理やり犯したことも、敗因のひとつであったが、当麻はそれを認められないでいるのだった。カオスに、なぜあの転生した遼でなければならないんだ、と責める当麻。二人はついに、アラゴ城攻略の直前に、技で対決する。当麻の破壊的な技「風威召喚」を、全力をかけて阻止するカオス。アラゴをとめるには、５人の力が必要だ、おまえ一人のその暗黒の技では、アラゴに吸収されてさらにヤツの力をつけてしまう、と言われる。カオスはその後、自らの首を地面に落とし、アラゴ城への道を作る。アラゴにしかし吸い込まれてしまう４人。前回の戦国時代の時の再現である。遼は仲間を涙ながらに討つが、その時白い鎧が現れて、アラゴをいったん倒すことができた。

新宿の街はいったん平和に戻ったかのように見える。遼はやはり、過去の記憶が思い出せないでいた。それどころか、仲間ごと討てと命じた当麻の冷たさで、「当麻は自分しか愛していないんだ」と言ってしまう。激しい衝撃を受ける当麻。夜、寝ている遼の枕元に幻影として現れて、「好きだよ」とささやくが、遼は何もわからないでいた。遼はあいかわらず、伸と仲良くしていて、当麻も征士と行動をともにしていた。

最初はアラゴからの敵がまた現れるのだが（さらんぼう?）、次に現れた剣舞卿は、実はかつてカオスと同士だった男であった。彼のつれている黒炎はその証拠である。剣舞卿はあくまで、地球の歴史にのっとってアラゴを駆除するというカオスと意見が合わず、別行動を取っていたのだが、実は破壊的威力の

ある白い鎧を開発したのは彼であった。遼たちを試す剣舞卿。しかしその体は暗黒の力に蝕まれていて、余命いくばくもなく、遼たちに倒されてしまう。剣舞卿は、死ぬときに遼に天空を理解してやってくれと言う。記憶が少し戻った遼。互いの気持ちが高まって、ついに当麻とベッドをともにする遼だったが、今度は二人をのぞく３人が魔将にさらわれてしまう。二人のもとに、美少女カユラが敵としてやってくる。

カユラは時空の番人で旅人であるカオス一族の娘であったが、アラゴに連れ去られて洗脳されいた。カユラを倒そうとする遼。しかし当麻に止められ、そうするうちについに当麻の目はカユラの投げた砂で失明してしまう。しかも遼と当麻は別々の坑道に別れてしまう。その頃朱天童子は、カオスの残留思念がきいて、善の心を取り戻すことができつつあった。彼はナスティのもとに現れて、一緒に時空の旅に出ようと言う。新宿の街にはアラゴが再び現れて、自衛隊が出動していた。朱天はナスティとともに戦国時代に飛んで、時空転生の石を動かす。それは、アラゴが同じ歴史が繰り返すように仕掛けた石であった。

仲間の３人を救い出した遼だが、当麻は失明したまま、アラゴに捕らえられてはりつけにされる。だがカユラも遼との戦いで、元の自分を取り戻しつつあった。そこへ朱天が現れて、カユラを元通りにするのだが、朱天は力を使い果たして死んでしまう。元に戻ったとたん、カユラはアラゴに髪の毛を捕まえられてぶら下げられて、当麻と一緒に吊り下げられる。アラゴ「ふふふわしにはむかった一族は全部根絶やしにしてやる。」

当麻「一族などない。あるのは、貴様の時空違反罪だけだっ。」アラゴ「んんん？なんのことかな？」当麻とカユラの体に怪光線を浴びせて喜ぶアラゴ。そこへ遼が、最後の力を振り絞って魂の双炎斬をとき放つ。当麻やほかの３人の技も合わさり、時空の果てにふっとぶアラゴ。ついに、勝利したのだ。ほかの魔将たちも、戦国時代にアラゴがスカウトした人間であったことを思い出す。だが、まだ旅は終りではなかった。

　ナスティは自宅のパソコンで戦闘の資料を集めていたが、当麻の叫んだ言葉に、不信感を抱く。もしかして、すべては予定されていたのではないのか。なぜ最初に鎧がいろいろな場所に飛んだのか。ナステイのパソコンに、その時当麻からのメッセージが入る。「あなたはこれを忘れる。」ナスティは次の瞬間、すべてを忘れていた。アラゴの存在しなかった時空に、遼たちの住む地球がとばされつつあった。遼はその夜当麻に会う。当麻の激しい行為の中にも、やさしさがあった。当麻「遼、オレがいたことを忘れないでくれよ。」遼「え・・・君、だれかな・・・。」当麻「もう忘れたね。」当麻の目から涙が零れ落ちる。当麻は本星に帰還し、時空査問委員会で査問を受ける。「君は現地の人間に必要以上の干渉をした。それで犯罪者の摘発が大幅に遅れた。君は禁固刑の処分を受けてもらう。」「のぞむところです。」当麻はみるみるうちに年老いて、カオスの姿になった。「その姿で、アラゴを追いたまえ。」すべての遼の記憶を抜き去られた当麻は、アラゴのいた時空にとばされるのであった。剣舞卿も、かつてそうして本星から流刑にされた番人の一人だった。彼らは地球などの現地の人間と交流しながら、カオス一族を形成していたのである。カ

ユラは剣舞卿の忘れ形見であった。

　魔将の鎧は、アラゴのいた時空の古い時代に、それぞれエジプトや中国の土地に飛ばされていた。それを追って太古の地球を旅を続ける魔将たちとカユラ。しかし、ついに力尽きて倒れる。カユラだけが、一人残ることになる。彼女は地球の人間とは、歳の取り方が違うのである。やがてカユラは年老いて、尼の姿になっていた。彼女は戦国時代の日本にまでたどりついていた。道に腰掛けて休んでいるところへ、一枚の絵巻物を追ってかけてくる、年若い当麻の姿が現れる。カユラは懐かしい顔に目を見張る。「天空殿!」これからまた、あの歴史がこの時空では繰り返されるのだ。カユラの頬には、とめどなく大粒の涙が伝い落ちるのだった。

　疲れた。えーと、これは確か元ネタが「惑星ソラリス」を書いたスタニワフ・レムの小説でこんなのあったんですよ。まあ「ガリアン」もそうだったけど、他の惑星から来た人は、現地の人間に干渉してはならない、という法則があるというヤツですよ。それに時空ネタを混ぜています。「時かけ」パターンですよ。ええ。もう何がなんだかわからない具合になっておりますが。「暗黒の力」ってなんだよ、って自分でも突っ込みを入れてますよ。まあ普通に考えるとマイナスエネルギーなんだと思いますが。しかしホント、無責任にこれ書いてましたよね。もう「そんな感じだっ」って感じで書いてましたからねー。ええ。同人だから。オチが知りたかった人、あれはでも、こういう話だったのですよ。かなり複雑な構造をとってます。ま、私としてはですが・・・・。あと手塚さんの「火の鳥」の異形編

はもちろん参考にしましたですよ。これは言うまでもないかな。最初に絵巻物が出てくるのは、河原よしえさんの公式のトルーパー小説から拝借しております。確かそのはずだったと思います。

ガサラキ・静かなる湖水のほとりにて

おはよーございます。本日のお題は「ガサラキ」でございます。激しく右翼がかった作品なので、私ももう「こいつわ」と見放してだいぶたつのですが、ネット上で同人小説を書いていた時期がありました。現在は削除しているので、ありませんが、いちおうそのあらすじをここに書いておきます。ま、自分へのメモですね。ノートに最後の場面だけ走り書きしているんだけど、そのノートもどこにやったのかわかりませんから。蒼紫と紂王のノートは保管してあるんだけどもねー。え、紂王のも聞きたいですか？別コラムで投稿しますかね。あの小説も途中で放り出してあるんですが・・・・小説って本当に難しいです。小説に比べるとあらすじは簡単ですよね。細部が抜け落ちてますから、全体像だけですからね。

あらすじ→ジャンヌ（ミハルの前世の姿）は、ある時神の声を聞き、ランスの城にまで、拾った骨嵬とともにやってきた。敵を骨嵬で倒せたので、王の信任を得たのである。王はミハルを王室づきの錬金術師である、ファントムにその身柄を預けることにした。薔薇の生い茂る湖水のほとりで会話をかわす二人。「神とは、遠くにいて守るものです。私は神のために戦っております。」ミハルの言葉に、疑問を投げかけるファントム。「本当にそうでしょうか。」「あなたは神に対して、失礼

なことを言っておられます。」ミハルはファントムに不信感を抱くが、不意にその手を取って引き寄せられる。「私には、もうあなたしかないのです。」「いや」ファントムを振り切って、駆け出すミハル。ファントムはその場に立ち尽くすのだった。

　ミハルの部隊は、進軍し始める。たくさんの敵を骨嵬で倒すが、そのたびに敵の悲鳴や断末魔の苦しみを感じ、ミハルの心はぼろぼろになる。テントでこれから先の進軍の相談をするミハルとファントム。ファントムは「昔私はあなたのために傷を負ったのです。」と、体の傷を見せる。それはミハルのさらに前世の時の出来事であった。「何度も自分で死のうとしましたが、やはり首を落とさないとダメなのでしょう。しかし私にはその勇気がない。そして、今、あなたがいるから。」ミハルは「なんのことかわかりません。」と答えて、ファントムの手から逃れようとする。「神の声が聞けなくなります。」ミハルの必死の懇願に、ファントムはミハルを犯す手を止めるのだった。

　フランスを開放したミハルであるが、勝利の栄光はミハルの心には届かなかった。それどころか、教会から魔女であると言われ牢獄に閉じ込められてしまう。ミハルは死者たちの霊と交信し、毎日泣き暮らしていた。宗教裁判が始まった。弁護人として、法廷に立つファントム。ミハルは被告人席で、フラフラとさまよったままだ。裁判官は、一清の前世の姿であり、ファントムが数万年にわたり、その意識を恐竜時代から追い詰めてきた敵であった。ファントム「また・・殺そうとするのです

か。」一清「んん？なんのことかな？私はフランス国教協議会の名において、発令する。被告人は死刑だ。君はこれからも錬金術の研究でもしていたまえ。それでも弁護士かね。ははははは。」ファントム「あなたという人は・・・・。」評決に従って、ミハルの十字架の下に薪が積み上げられ、火がかけられる。ファントムは、嵬の力を発動させ、その場の重力値を変動させる。ファントム「あなたは、もう一度死ぬといいですよ。」ものすごい重力の圧力を上からかけられて、苦悶する一清。一清「私も嵬のはずだッ！」一清の体は血を噴出して無残にはじけ飛ぶ。それを目撃した、ミハルは心に大きな衝撃を受ける。しかし十字架にはりつけられたまま、空を飛んでどこかへ飛ばされてしまう。ファントムは一人残って、しきみの場で悲しげにつぶやく。「また・・・行ってしまった・・・・。」それがファントムの、宿命なのであった。ミハルはかつて一清との戦いで、記憶を思い出せず、短命なところに落ちてしまった、ナダの民だったのである。

　まあこれはMEIMUさんの書いたマンガの「ジャンヌ編」によっているんですけど、こうなったほうが私の希望かなーっ、て感じです。なんかところどころ筆がすべっておりますが（笑）。すごい単純な話なので、これすごい楽な話なんですけど、いろいろあって書けないことになってしまいました。期待していた人、いたとしたらどうもごめんなさい。あはははは。え、紂王ですか。紂王の話もこういう感じの話なんすけどもね・・・・。

封神・瑞獣の城　３

　あらすじ→紂王は、殷王室の三男に生まれた。彼は身分の低い側室の子供であったが、子供の頃から才能と運動神経に恵まれており、父の皇帝は紂王に位を譲りたいと考えていた。しかし、父王は女好きで、たくさんの側室があるのに、まだ人質を妲己の国から取ったのである。幼い妲己は、紂王の父の後室にされるとは思わずに、殷にやって来た。すぐに子供同士で、紂王と仲良くなる妲己。不思議なことに、父王はそれを止めずにとめおいた。しかし、ある時二人の間に障壁ができてしまう。妲己は後室に入れられてしまう。しかし、まだ父王は手を出さずにいた。

　紂王は妲己への思いをおさえることができずに、ある日ジョカの神殿の像の下に、落書きをしてしまう。それは、妲己の美しさをたたえる詩であった。その詩に破綻の予兆を見る聞仲。鋭利すぎる刃物のような詩だと思う。父王は怒り、ついに妲己を我が物にしてしまう。しかし、これは父王が最初から考えていた計画であった。「王であるということは、人でなくなるということなのだ。子供時代の脆弱な記憶を克服できなくて、なにが王か。」紂王は、自分は軍人になると誓い、上の二人の兄を押しのけて前に出ようとするようになる。

　やがて紂王の父は病気で亡くなったが、妲己は父王の妻妾という身の上なので、紂王は決して手を出してはならないということになっていた。儒の教えである。紂王は、臣下の者の進言に従い、最初は正室をめとる。姜氏である。姜氏は高慢な女であり、妲己を小間使いとしてこき使った。自分の子供のおむつ

や着物を妲己に織らせる。しかしある日、姜氏は紂王の心が自分にはないことに気づき、妲己を計略して男たちに輪姦させてしまう。王の怒りが爆発した。紂王は姜氏の目をくりぬき、黄飛古の妻を欄干から突き落とす。どちらも紂王を誘惑した女であった。

　その頃、殷王室になまぐさい血が吹き荒れているのを知った西岐の姫昌は、伯邑考とともに、朝献に訪れる。わざと紂王を怒らせるような貢物をする二人。夜、琴の名手の伯友考は、妲己の部屋に訪れて、妲己をレイプしてしまう。伯邑考は自分と一緒に逃げようと妲己に言うが、次の朝、紂王にばれてしまい、紂王は伯邑考を炮烙の刑の第一号にしてしまう。そして、焼け焦げた伯邑考の肉体の破片を、父の姫昌に食べさせる。紂王の残虐さに、妲己の心は打ち震える。「王、私ひとりのためにたくさんの者が・・・・。もうおやめください。」「うるさいっ。これでいいのだ。予は間違っていない。」ついに妲己との禁畏を犯してしまう紂王。朝歌の町に、紂王を嘆く詩があふれかえる。その頃、殷の包囲網が太公望たちの働きでできつつあった。紂王のもとに、今度は妲己の姉が正室として差し出される。妲己の姉は、冷たい女であった。紂王を麻薬で殺そうとし、妲己に紂王の食事に毒を混ぜるように言う。恐ろしさに震え上がる妲己。できないと言うと、姉は「男とは抱かれるものではない。抱くものだ。」と言い、「おまえはそれでも貴州候の娘ですか。」と妲己の頬をはたく。すべてに絶望した妲己は、紂王との幼い頃の思い出が残る、星座を祭った祠で首を吊った。それを知った紂王は妲己の姉を寝室で剣で惨殺する。紂王のもとに、その時北海での聞仲の悲報が届けられる。衝撃

を受ける紂王。「聞仲・・・・この女の処し方も、剣での戦い方も、お前はなんでも教えてくれたのに・・・。」かつて妲己への思いをたしなめたのは、聞仲であった。その時の聞仲の言葉が紂王の脳裏に響く。「お前が神殿に書いた詩を読ませてもらった。駄文だ！幼きもの、弱きものを貶めることの、何処が悪い！」紂王は自分が強い男である、と必死になって思う。しかし次第に孤独に陥っていく。

　だが、伯友考を殺された西岐の復讐は、それで終りではなかった。妲己の死体は盗み出され、大きな甕に蛇が詰まったものに入れられて、首だけ甕から出た状態で、紂王のもとに届けられる。紂王「西岐では女を哺にするのか？」
　臣下の者「おそれながら、貢物だそうです・・・。」紂王「聖人文王からのか？聖人の心臓には七つの孔が開いているという・・・予はそれを見たくなったぞ、比干・・・。」紂王は甕を割り、蛇の群れの中から裸の妲己の死体を助け出す。紂王の心には、もはや西岐への復讐心しかなかった。しかし妲己を失い、心の支えがなくなった紂王は、妲己の死体とともに入っていた蛇の血抜きをし、酒を作ってそれをあおるのだった。やがて牧野の戦いになった。紂王は天才的な剣技を身に着けた男であったが、やはり多勢に無勢で、西岐軍に捕らえられてしまう。「兄ちゃんの仇だ。そう簡単に殺すと思うな。」姫発の手で、牢獄に入れられる紂王。目と舌をくりぬかれ縛られて、妲己の死体をなますにしたものを与えられてしばらく留め置かれる。朝歌は焼け野原となり、論功行賞が長引き、民は激しく飢え、治安は吹き荒れた。ある冬の朝、朝歌の都大路のはずれに、ミイラのようになった男の死体が木の板にはりつけられて

放置されていた。首には落書きの文字で、「キョウ族の王」という板がかけられていた。

うーん、えぐいですね。これは私の考えた作品群の中でも、トップを切って梅味です。蒼紫のやつでも、ここまでえぐくないですよ。この甕の首から女の首が出ている、というのは映画「西太后」でやっていた刑罰から考えています。あれは甕の中には虫が入っていましたけど、中国は怖いなあ～～～、怖いですよ、やっぱりあの国は。うん。で、それを君はいつ書くのかね？と頭の上で今言われましたけども、いつかなあ、蒼紫のが終わらないと書けないからなあ・・・。まあこれは私の考えた「反三国志」みたいなもんで、そんなわけねぇだろ、と言われると思いますがね。それにしても、途中のエピソードもっと細かく考えていたんだが、もうこれで放置です。

しかしまあ、「封神演義」というネーミングにも、味があるなあと思いますよ、はい。

THE 八犬伝　婆沙羅

さて、お待ちかねかどうかわかりませんが、あらすじシリーズの最終作品、「THE 八犬伝」の同人です。これは昔、マンガの絵コンテを楽しんで書いたんですが、まだ子供が小さいときだったので、主人に怒られまして、それを紛失しているので、だいたいこうなっていたはずという、おぼろげな記憶で書いています。やおいで、しかも小文吾 × 道節というものすごいカップルなので、嫌な方は読まないでくださいね。

　あらすじ→犬士を探す旅を続けていた、犬田小文吾と犬坂毛野は、一軒のしもた屋に宿をとった。宿のおかみは老婆であり、それ以外の者はなかった。夜半、囲炉裏で寝ていたところ、おかみが現れて小文吾に言う。「おまえは義弟を手にかけた。また近い将来おまえは弟を手にかけるじゃろう。それがおまえの運命なのじゃよ。」もののけの気配を感じ、老婆に斬り付ける小文吾。しかし老婆は哄笑を残し、闇にかき消える。毛野はまったく気づかずに朝まで休んでいた。

　犬士と合流した、小文吾と毛野。しかし、道節の姿は見えない。山にこもって、危険な火薬を作っていると信乃に言われる。止めにいったほうがいいと暗に言われた小文吾は、道節に「仇討ちはもうあきらめろ。おまえもみんなのところに戻ってだな」と言うが、道節に邪険に追い返される。帰った傷心の小文吾を、毛野は自慢の舞でなぐさめるのだった。

　その後、信乃や浜路姫をめぐる戦いがあって、道節は危険なときには現れて、助けてはくれるのだが、みなとは距離を置いていた。「それは道節さんには、仇討ちがおありだから」と毛野は小文吾に笑って言う。信乃と浜路姫の祝言の席があって、その後道節は仲間から離れて一人旅に出る。旅に出るとき、道節は自分の母親のことを小文吾に話す。「オレの母親は、気の毒な女だったよ。オレの父親に見初められて・・・・そうでなければ、母親は死ななかったかも知れん。ま、今となってはどうでもいいことだな。」自嘲気味に笑う道節。「おまえはまだ父の仇を討つ気なのか、犬山」小文吾の言葉に道節は答えない。ただ、「毛野を大事にしてやってくれ。あいつはあぶなっ

かしくって、見てられねぇんだ。ま、オレが言うようなことじゃないがな。」と小文吾に言うのだった。

　歳月が流れた。毛野と暮らす小文吾は、何度か不思議な夢を見る。それは悲しげな馬に乗った妹の姿だった。「どこへ行くんだ、お縫。」はっ、と目が覚めるとき、自分は失った妹に対するように、道節の身を案じているのだ、と小文吾は思う。その様子をじっと見ている毛野。ある時、酔いつぶれた小文吾を誘って、小文吾と通じてしまう。「おまえとはもう、暮らせねぇ。」
「あなたはやはり、道節さんのことを。」言いかけた毛野の目の前で、小文吾は戸を閉めて出て行くのだった。

　街道で仇討ちのためにさまよう道節。母親を追い詰めて殺した父への、複雑な思いが渦巻く。それでも自分は、父の仇を討たなければ、と思うがある時傷を負ってしまう。小文吾はついに、道節のいる寺を見つけ出す。長年の宿縁で、杯をかわす二人。小文吾は、手に届かないものを追うように道節に言う。「まだ仇討ちをするつもりなのか？」道節は静かに笑って答える。「実は坊主になろうかと思っている。」「仏門に入るのか。」「そうだ。」小文吾の心にあやしい思いが交錯する。「おめぇは、またオレの手のとどかねぇところへ行こうって言うのか。今までさんざん人をあやめておきながら、仏門に入るだと。ふざけちゃいけねぇ。」道節の体を押し倒す小文吾。「なにをするんだ、兄上。」道節は、小文吾に抵抗する刃を返し、おのが喉にあてる。「兄上にこんなことをさせるオレがいけないんだ。やっぱりこんなオレは死んだほうがよかったん

だ。」自害をする道節。小文吾は、道節の死体に取りすがって泣き崩れる。「オレはまた大切な弟をあやめた。これがオレの運命だったとは・・・なんでおまえが仏門に入ることが許せなかったんだ。すまん、犬山・・・・・。」小文吾は自分の首を刀でかっさばいて、道節の横で天に召されるのだった。

まあこんな感じだったかなあ。こまかいセリフとか、こうだったはずなんですけど・・・。最後の小文吾と道節のやりとりの間には、舞を舞いながら涙している毛野がインサートされる予定だったんですけど・・・・。しかしなんちゅうか、これはものすごいわけのわからんやおいの世界です。元ネタは山田風太郎先生の「忍者六文銭」という短編小説からヒントを得ています。タイトルは、室町時代を描いた「婆沙羅」と、道節の回の「婆沙羅舞」からつけているんですけど。とにかく、心中ものなんで、これはなぁ～とか思うし、道節と小文吾の組み合わせという時点で、はかなげなやおいが好きな人からは、クレームの嵐が来ると思うわけなんですよ。ボーイズラブとか、好きな人にはもう絶対ダメというか・・・。「エヴァ」のカオルシンジが好きな人とか、もう絶対ダメですよね。美少年じゃないもん、青年というか大人ですからねー。最後血みどろで死んでますし、二人。

まあしかし、私は映画の「おこげ」なんかも好きなんで、こういうのもアリなんですよ。というか、「おこげ」のセックスシーンは、きましたですよ。あーれーはーいやらしかったなあ。批評家には酷評されてましたけど、そんなにひどい映画じゃなかったと思うんだけど・・・。

ということでした。（笑）

DEATH NOTE赤頭巾シリーズ１

ナオミを殺した後、ライトは自責の念にかられていたが、ある日手紙が速達で届く。知らない女の名前が差し出し人欄に書いてある。サユ「お兄ちゃんのファンからの手紙ね。モテるね、お兄ちゃん」父・総一郎の目に留まらなかったのが幸いと思いながら、ライトは封を切ると、女の文字で「あなたがキラさまですね。何年何月何日に、港の見える防波堤の公園で、私とお会いしましょう。私は、赤いフードのついたコートを着ています。私に憑いている死神はレムです」という手紙が入っている。ライト「これはなんだリューク。僕以外にも死神がいるのか」ライト、電車に乗って、人目につかない防波堤の野鳥公園に歩いていく。誰もいない公園の先に、赤いコートを着た少女が座っている。横にレムの死神の姿が見える。警戒するライト。ライト「君は？」ミサ「あなたがキラさまですね。私は死神の目を持っております。」ライト「君もノートを使っている？」ミサ「いえ・・・私は目だけです。人を殺すのは恐ろしいから、ノートは後の死神に返しました。」ライト「・・・。」二人で人目につかないようにして、ライトの部屋に移動する。ミサは、ライトが犯罪人を殺す手伝いをするために、目をもらったとライトに言う。ミサ「私は寿命を半分に縮めましたが、それでキラさまがたくさんの悪い人を裁けるのなら、それでいいと思ってそうしました。」ライト、少し考え込み、「よし。君の目があるなら、僕は今まで殺せなかった奴らも殺せるようになるかも知れない。二人でがんばろう」と言う。ライトはなんで自分の名前をキラと呼ぶのかとたずねると、ミサは古

い少女漫画の主人公が好きだったから、と答える。

夜。麻薬関係の取引をしているらしい情報を、インターネットでつかんだライトは、そのビルに忍び込むようにセキュリティを落として、二人でその取引場所に赴く。連携プレーで、ミサが相手の名前を携帯で伝え、犯罪人の名前をライトがすばやく書いて、人を殺していく。二人でできたことを喜ぶが、実はミサの姿が監視カメラのひとつに残っていた。L「この少女・・・なんでこのビルに入っていくんでしょうねー。」総一郎「その少女が殺したのかも知れない。とにかく、洗うんだ。」Lは学校でライトと同級生になりながら、じわじわと追い詰めていこうとする。ライトは学校の聴講生に来るようにミサに言う。もちろんLの名前を見るためである。だが、携帯で連絡を取りあうことに失敗し、ミサはLたちに確保されてしまう。ミサは拘束具をつけられて精密検査を受けさせられる。L「夜神くん、私はああいう殺人は、考えたくないですが、超能力の一種ではないか・・・脳が異常に発達してそういうことができてしまうのではないか・・・・そういう可能性を彼女は秘めています。」ライト、トイレまで盗撮している動画を見せられ、「変態」と思うが、どうすることもできないので、自分がその犯人で超能力者かも知れないと言い出す。「僕が知らないうちに人を殺しているのかも知れない」「あなたがですか？」総一郎は、ついに「息子と二人で話しをさせてくれ」とLに申し出て、「わしはノンキャリアでここまでたたき上げてきた。わかるか。ノンキャリアだ。私は人を殺してきたことはないんだ。一度もないんだぞ。この犯人はもう100人近く殺している。そんな息子は、わしにはいらないんだ。」ライト「父さん」総

一郎、ライトのこめかみをピストルで撃とうとする。すさまじい緊迫感。総一郎、ピストルを撃つが、やはりライトを撃てずにその場で慟哭する。Ｌ「夜神さん、もういいです。」Ｌはそう言い、今度はライトを24時間監視するために、手錠をはめて一緒にいることにする。

＝つづく＝

DEATH NOTE赤頭巾シリーズ2

ライトはＬと手錠につながれたまま、Ｌからキラ殺人の特徴を聞かされる。Ｌ「キラの殺人には特徴があります。いわゆる犯罪者でも、極悪人の部類だけ選ぶ。彼の中には、おそらく堅固な社会に対する正義があると思います。しかし私に言わせれば、それは間違った正義です。まあ彼もレイ・ペンバーのような人間も殺しますが、それは嗅ぎ付けられた場合だけですね。つまり例外です。さて、夜神くん、私とちょっと古いビデオを見てみましょう。」Ｌ、銀行強盗の様子を写したフィルムをまわす。Ｌ「これからこの強盗が、人を何人か殺します。」ビデオに写る犯人の殺人。しかし、警察にやがて確保される。Ｌ「この犯人はその後、刑務所に入って真人間になって出てきました。われわれのやり方はこうです。早急に結論づけてはいけません。すべての人には更正される機会が与えられるべきだと思っています。」ライト「・・・・。」Ｌ「あなたはこの犯人、この場で射殺されるべきだと思いますか。夜神くん、私の質問に答えてください。」ライト「ああ・・・・射殺されるべきではない。僕もそう思うよ。」夜。手錠につながれたままのライトとＬ。Ｌは睡魔に負けて寝てしまう。ライト起き上が

り、リュークを呼ぶ。ライト「僕はバカだったよ。死神の目を僕にもくれ。」リューク「くくくくく、いいのか？おまえあんまり人を長く殺せなくなるぞ。」ライト「その倍の分だけ殺してやるよ。ノートを僕にくれ。」ライト、Ｌをその場で殺す。手錠がだがつながれたままだ。鍵を必死で探すが見つからない。リューク「何めんどうなことしてんだ？この手を切ればいいんだろ。」死神の鎌で死んだＬの手首を切断するリューク。ライトはミサを助け出し、警察のビルの防壁を破る。その時、監視員を全員目とノートで殺して行く。ビル内の人間が全員死んでしまう。ライトは決定的にお尋ね者になり、指名手配が発令されそうになるが、総一郎にそれを止める指令が届く。指令はニアからであった。

　ライトは名前を変え、ミサとアパートに潜伏していた。ライトは生活費を稼ぐために働いている。その就職の際には、相手の行動を操り、自分に疑いを絶対に持たないようにしていた。ただし、そうするにはその人間の人生を終わらせなければいけなかった。ライトは思う。こうして人間の人生を動かしていくと、僕は自分が神なのではないかと錯覚すらしてくる。だが僕は、死神、死神なんだ。ミサはライトのことを悲しんでいた。ミサ「目を持つのはミサだけでよかったのに・・・・キラさまが早く死んだら、悪い人をたくさん殺せなくなってしまいます。」ミサは自分もデスノートを使うことを思いつく。「キラさまだけに、裁きをさせているわけにはいきません。」レムはミサを止めるが、リュークはライトの知らないところで、ミサにノートを渡してしまう。ミサは人を殺してしまうが、それで足がついて、ニアに確保されてしまう。

＝つづく＝

DEATH NOTE赤頭巾シリーズ3

ニアは「私はノートに文字を書いたぐらいで、人が死ぬとは思っていません。」と言う。ミサの自白は無視し、「この犯人には特別な能力がきっとあると思っています。」と言い出す。実はアメリカではそういう超能力の研究が続けられていて、自分はその研究対象の一人なんですよ、とミサに言う。何がなんだかわからないミサ。ニア「Ｌも実はその一員だったのです・・・・・でも、彼の能力はまだ未開発でした。ですから、最初にこの大量殺人犯にぶつけられたのです。」ニアはライトが実際に人を殺すところを見たいと言い、ミサを使ってライトをおびき出す。まず、報道でミサが大量殺人犯だったと報道する。ミサは魔女裁判にかけられた少女のような騒ぎになる。ミサを擁護する論調も出てくるが、次第に下火になり、ミサには死刑が確定される。

ライトはニアたちのいる場所をパソコンで必死につきとめようとしていた。あるサイトに書いてある暗号を見つける。それはライトとミサだけが知っている暗号の文字、キラの変則数字であった。発信源を見つけ、そこからニアたちの居場所をつきとめる事に成功する。港の古い倉庫に行くライト。ニア「あなたは私たちを殺せませんよ。私たちを殺したら、大切なミサは自動的に死ぬようにセットされていますから。ミサは遠隔操作で殺すようになっています。では実験を始めましょう。ノートに書かずにそこにいる人を殺してみてください。」一人の男・・・浮浪者のような人間がす巻きになってしばられている。ラ

イト「僕にはそんな能力はない。」ニア「そんなはずはないですよ。死神というものがあるとしたら、それはあなたの作った幻影です。あなたは死神という装置を通じて、能力を放出しているのです。その最大レンジ幅の発現をわれわれは見たい。」ライト、リュークにノートをなしに殺すことを願う。リューク「ん？なんで持っているピストルを使わないんだ？仕方がない。俺が殺してやろう。その代わり、おまえも心臓麻痺で死ぬ。」ライト「ああ。それで僕も本望だよ。」死神の鎌で次々とその場にいる人間を殺すリューク。驚いたニアたちは、ライトに向かって一斉射撃を加える。ライト、ニアの頭を拳銃で打ち抜くが、血まみれでその場に倒れる。ライト「しにがみが・・・・・。」手を伸ばし、死にそうになっている数秒間で、ライトは天国の神にミサの救出を必死に願う。「今あの子を殺すな、頼む・・・・神さま・・・。」リューク「デスノートを使った人間に、天国があると思うな。ミサにも死神がついたんだ。」ライト「ミサ!!!」ライト死亡。ミサはライトが死んだことをレムから告げられると、自分も死にたいとレムに懇願する。レム「そんなにライトのことが好きなのか。俺にはこんなことしかできないから・・・・。」躊躇しながらミサを殺すレム。ミサは「ありがとう」と言いながら、心臓麻痺で死んでしまう。レムはリュークとシドウと戦って死神の鎌で死に物狂いで殺すと、どこかへ飛び去っていく。<デスノート・「完」>

　なんかスティーブン・キングの小説みたいになっちゃったなあー。なんか最初の犯罪の更正というテーマがどっかいっちゃったし。まあいいか。それでは。

DEATH NOTE赤頭巾シリーズ4

黒い画面にスタッフ名が白い文字でクレジット。陰鬱なBGM。最後に「DEATH NOTE」のタイトルが入る。

団地の公園。子供がキャッキャッと遊んでいる足元に、一冊の黒いノートが落ちている。子供たちは気がつかない。ライトだけに見える感じでそのノートがアップになる。ライト拾い上げる。「誰か落としたのか？」ライト、ノートに持ち主の名前が書いていないのを不審に思うが、ノートを家に持って帰る。夜。受験勉強の合間に、ノートを出して見る。アニメのキャラクターのノートのような造り。最初に黒のビニールコーティングの紙が綴じてあって、そこに「使い方」というのが書かれている。文字は英語。ライト読む。「これは死神のノートです・・・なんだ、こんなの売っているのか。」ライト笑い出すが、なんとなく子供の頃を思い出し、かばんに入れて持ち歩くようになる。

ライト電車に乗っている。電車内で、高校生のグループの女子高生へのチカン行為を目撃する。乗客たちは目をそむけて、誰も助けようとしない。ライト、不快感がこみあげてくる。しかし黙ってつり革を持って混んでいる電車の中で立っていると、突然耳元で幻聴のような声が聞こえる。「そいつの名前は、渋谷卓夫。渋谷の渋に・・・・。」と漢字を説明する。ライト、ぎょっとなる。電車の駅に止まり、人が降りてライトと渋卓は向かい合って座席に座る。ふんぞり返っている渋谷。ライトの耳元にさっきの声がまた聞こえる。「なあノート持っているんだろ・・・書いちゃえよ・・・最初はひらがなでいいか

ら。」「うるさいな!」ライトの声に、周りの人間がライトを奇異に眺める。まだ電車は走っている。ライト、何か決意した顔で、「子供の遊びなんだ」と思い、自分の気持ちを整理するつもりで、ノートを出して文字を書き、すぐに電車を降りるが、背後で悲鳴が聞こえる。渋谷が座席からゆっくり倒れるのが見える。足早に走り去るライト。

　ライト自宅に帰る。自分の部屋のドアを開けると、そこにリュークが立っている。リューク「おかえりー。俺死神。そのノート俺のなんだ。どうだ？うまく行ったろ？」ライト驚愕。「返すぞ、こんなノート」リューク「ダメ。もうそれお前の。俺お前に憑いちゃったから。ずっとお前のそばにいるよ。お前一人殺しちゃったから、もう地獄行き決定ー。」それからというものの、トイレの中までライトの前に現れるリューク。ライト、気が狂いそうになる。このままではダメだ。リューク「悪いやつ殺せるよ。どんどん殺っちゃえよ。死ぬまでお前のそばにいるからさ。」ライト、自分の人生について考える。本当に死神が憑いたのだとしたら、せめていい事をしていこう。ライト、ノートで死刑の決まった犯罪人を殺すことを思いつく。これが僕の人生なんだ。ネットで情報を見つけて、犯罪人の名前を毎日書くライト。その頃ライトの父夜神総一郎は、死刑囚が心臓麻痺でばかり死ぬことを、疑問に思っていた。捜査はしかし、警察内で行われていた。総一郎の同僚は、「何か・・・集団自殺のような方法で死んでいるのではないか。」と言う。「アメリカのFBIから、興味深い事例だと問診してきているのだが・・・・。」総一郎「FBIがからむと面倒なことになる。司法省と警察だけで、捜査を進めるんだ。」と答える。

　ある夜、ライトはテレビを見ている。殺人犯の逮捕の実況中継が写っている。リューク「やれやれ大変だな。なあライト、あれも殺してみようぜ。」ライト「いやだ。」リューク「そんなこと言ってたら、また人が死んじゃうぞ。一人助けたら、いい事あるかも知れないぜ。おまえに。あ、そうだ。俺が言わなくても、人が殺せるようになれるよ。死神の目。お買い得だぜ。顔を見ただけで、そいつの名前がわかるんだ。自分の寿命が半分になるけどな。」ライト「誰がそんな取引するもんか。」その時殺人犯が一人殺したと緊急ニュースが入る。ライトの耳元で、リュークが犯人の名前を教える。立ち上がるライト。サユ「どうしたのお兄ちゃん？」階段を駆け上がり、自分の部屋に入ると急いでノートを出して犯人の名前を書くライト。ラジオを急いでつける。犯人が死んだことを伝えるニュースを聞くライト。リューク「よかったな。大きなことをしたなライト。お前も人を殺す味を覚えてきた。」ライト「うるさい!」ライト、ノートを壁にぶつける。

　その頃、ＬがFBIの捜査官を日本に送り込んでいた。心理分析官のレイ・ペンバーと南空ナオミが空港に降り立つ。レイ「犯人の特徴は、まだ若いということだ。」ナオミ「どういうことでしょうか？」レイ「人を殺せる能力があっても、小さなことにしか使っていない。若者・・・学生の線だと思う。」ナオミ「はい。」Ｌはライトが殺した犯人の情報が流れた場所を特定して、レイたちに張り込ませるが、ある時からライトを尾行するように命令する。電車内。レイ、ノートを広げているライトを目撃する。携帯でカシャ、と写真を撮ってから、座っているライトの前に立ち、「そのノートをちょっと見せてくれな

いか？」とノートに触って言う。ライト、走って逃げ出す。逃亡劇。夜の公園。ライト、公園のトイレに隠れる。レイ、ピストルをあげながら「出て来い。何もしない。そのノートをこちらに渡すんだ」と言う。ライトの耳元で、リュークが言う。「レイ・ペンバーだよ、さっさと書いちゃえよ。」ライト、ノートに文字を書く。心臓麻痺で倒れるレイ。ナオミ、驚愕。拳銃の狙いを定めて、ライトのいるトイレの中に入ろうとする。リューク「あいつの名前は南空ナオミ。」ライト「ナオミ・・・女か？」リューク「書いちゃえよ、早く。くくくくく。早くしないとお前が死ぬぞー。」ライトの頭の中で南空ナオミの名前が反響する。拳銃を構えて入ってくるナオミ。観念してノートに名前を書くライト。ナオミが目の前で倒れる。ライト、「うわあああああっ。」と総毛立ち大声で叫ぶ。

＝最初の項目につづく＝

DEATH NOTE赤頭巾シリーズ5

赤頭巾で「デスノート」考えてみたのですが、もうこれ大場先生の話とライトがまったく違うキャラになってしまっているのですが、（多分悪人顔はあんまりしない。普通の高校生で、ちょっとパソコンかじっているぐらい。成績は中の上ぐらいで、東大には入れない）、魅上も出す案を考えてみました。で、私の案だと、魅上クンはすごい悪人になってしまうんですよ。原作の魅上クン、すごくかっこいいので好きなのに・・・・・。ですからこれを読んで、魅上クンのファンの方は殴らな

いでください。話がそうしないと座らないのでそうします。

　ライトはＬを殺害し、ミサとアパートに潜伏していた。そこへ、魅上が現れる。魅上「君もノートを持っているんだろ。私に見せてくれないか。」ライト「あんたは？」魅上「君たちの仲間だよ。私にはシドウという死神が憑いている。ホテルのレストランに来い。少し話がある。」高級ホテルに招待されるライトとミサ。ライト「あんたは俺たちを警察に渡すのか。」魅上「君はどうしてそう思うのかな？」ライト「あんたを見ていると、そんな感じがするんだ。死神とずいぶん仲がよさそうじゃないか。」魅上タバコに火をつけセリフ「君は教祖になるつもりはないか？」ライト「教祖？なんの教祖だ。」魅上「犯罪者撲滅運動の教祖だよ。君にはぴったりだ。だって君は純粋だ。教祖というものは、純粋でなければならない。」ライト「ごめんだな。」魅上「君は今私を殺そうと思っただろ。」ライト「!」魅上「でもできない。そう、最初から君が気づいている通り、私の顔の上には私の本当の名前の文字が君には見えない。そう死神と取引しているからね。」ライト「一体何の取引をしたんだ。」魅上「秘密だよ。われわれの組織のアジトまで来い。歓迎するよ。君の死神と一緒に。そこのお嬢さんも。では、失礼する。」ミサ、テーブルの上の料理を見て「私あの人嫌いです。」と言う。ライト「・・・・・。」

　ライト、ミサと一緒に魅上の指定した廃ビルの中に入っていく。中にはパソコンが何台も置いてある。いろいろなサイトの画面が写っている。世界中の情報が集められている。魅上「こちらへ来たまえ。」と二人を呼ぶ。魅上「なあ夜神。俺と一緒

に新世界を作ろうじゃないか。君はその新世界の神になるんだ。私の言う人間のリストを、君のノートに書いてもらう。」ライト「いやだ。」魅上「君は拒否できないよ。」ミサ、男たちに銃で包囲される。ミサは別室に監禁されてしまう。魅上はライトに言う。「人間はピストルがあれば、簡単に殺せる。わざわざノートを使って殺すんだから、意味がある人間を殺したほうがいい。そう、離れたところにいるヤツを大量に殺すには持ってこいだ。私はそう使っている。君もそうだろ。たとえばこの国の犯罪者が大量に死ぬ。いいことじゃないか。君はそうして世界をいい方向に動かしていくんだ。」ライト「あんたの言葉では、それは犯罪者とは限らないようだな。おまえのした取引というのは・・・まさか・・・・。」魅上「ああ。俺は殺したよ。シドウにたくさんの人間の魂を渡してやった。君のリュークはバカだな。いや、君がバカなのかな。」ライト「じゃあ、貴様は寿命がもう半分以下なんだろう。」魅上「あはははははは。俺の寿命？俺の寿命が短いって？君は笑わせるねぇ。死神がどういうものか、全然わかってない。」ライト「貴様」魅上、ライトを監視カメラで撮影しながら、監禁状態でノートに文字を書かせることにする。ライト「ちくしょう!!!」机を叩いて憤るライト。しかしどうすることもできない。「せめて、文字をゆっくり書くんだ。それぐらいしか方法が・・・。」リューク「どうした？倍の人間を殺すんじゃなかったのか。」ライト「うるさいッ」ライト虚空に目をすえる。

　別室でミサと二人で対峙する魅上。ミサにゆっくりと近づく。魅上「君の彼は今、ノートに名前を書いている。君もさぼっていないで書いてもらうよ。」ミサ「いやです。」魅上

「君のことはシドウからいろいろ聞いている・・・いやひどい話じゃないか。自分は手を汚さないで、彼にだけ殺人をさせるなんて。君は一体、彼の気持ちを考えたことがあるのかね？」ミサ「キラさまは、正しいことをしています。私はその手助けをするんです。」魅上「あっはっは、いいねぇ。それ。そのフレーズ、夜神クンの新しい教祖のフレーズには持ってこいだ。人々を煽動するには、そういう単純なフレーズがいい。」魅上、ミサの腕をよじり鉛筆を握らせる。ノートの上で二人の腕相撲。魅上「さあ書け。いい名前を書かせてあげるよ。某国首相の名前だ。」ミサ「いやっ。」魅上「書くんだよ。ほら。」ミサ、泣きながら文字を書かされる。しかし、最後の字のはらいの部分になった時、突然文字の線が乱れる。レムが「そいつの名前は・・・。」と言い、ミサの鉛筆を操る。魅上の顔がすさまじい形相に変わる。魅上「やめろ、貴様、私の名前を・・・・!!!」魅上死亡。ミサ動転しながら、部屋を出ようとするが、男たちに拉致されてしまう。

　ライトは文字を書いていたが、不意に何かを感じる。ミサの悲鳴の幻聴。椅子を立ち上がり、部屋の扉を体当たりで開けて出る。もぬけのから。ライト、ミサの書いていた魅上のノートを拾い上げる。ノートには殺人の記録のほかに、情報を流すサイトの記録や、国についての記録が残っている。ライトはそれを手がかりに、自分のパソコンで調べる。ライトはニアの情報をつかむ。Ｌとおなじく、アメリカ関係の心理分析チームの若いリーダーである。ライト「なんでこいつとつながっているんだ。」その時あるサイトの中に、キラの変則数字の暗号と、場所と時間を指定したものを見つける。「オオカミへ。赤ずきん

を返してほしければ、ひとりで来い」という赤い文字とともに・・・・・。

＝下の項目に続く＝

天空のエスカフローネ　ラヴァーズオンリー

さて、本日のお題は「天空のエスカフローネ」であります。この作品、私は大好きなんですが、ひどい鬱の時、集めたフィルムブックとか資料を古本屋に持っていきましたので、設定とかよく覚えてないんです。ただ、しつこく思っているカップルがあります。それはフォルケン×エリーズです。エリーズは物語の中では、アレンが好きだったことになっているんですが・・・。アレンにはお姉さんの結婚した人とか、ミラーナ姫がいるんだから、エリーズぐらいいいだろうと思うんですよね。それに比べてフォルケンは女っ気が獣しかなかったし・・・。獣人の双子ですが、あれは人間じゃなかったからなあ・・・。映画版ではソラを囲い者にしていましたけど、あれも私の考えるフォルケンさんじゃない気がしましたし。あくまで私の好きなフォルケンは、テレビ版のなんですよ。で、番組の終了にあわせてCD「ラヴァーズ・オンリーー」というベストアルバムが発売されたんですが、これの曲の並び順にあわせて、確か話を考えたんですよ。今ぱーっと書けるかなあ・・・。

あらすじ→フォルケンは、王国の長男に生まれ、竜を死闘の末に退治してエスカフローネと竜の契約を結ぶ。まさしく、彼が王国の王となるはずであった。しかし、彼は王国がなぜこのような外敵に脅かされるのか、そして天空よりの「まれ人」と

は何なのか、世界の不思議について興味を抱いていた。

　ある時彼は隣国の国に招待される。そこで、アレンと剣を交えるのだが、フォルケンは敵ではないと、アレンを退ける。まだまだ己れの未熟さを思うアレン。やがて時がたち、アレンは闘竜で竜を退治できる騎士にまで成長した。その催しに招かれたフォルケンと幼いバァンの兄弟。エリーズとフォルケンの最初の出会い、「世界の秘密をさぐりたいのです」というフォルケンの言葉に、本に夢中だった少女エリーズの胸はときめく。白い羽で、エリーズを助けるフォルケン。「天使のような方・・・。」しかし、王国の王となられる人なのだから、とエリーズは自分をおさえるのだった。

　フォルケンは父王の命により、嵐の中を、また竜を狩る旅に出る。しかしその行く手に巨大な機械帝国が現れる。ドルンカークは、飛竜に乗ったフォルケンを捕らえて、洗脳してしまう。フォルケンの翼はその際に真っ黒に変わってしまう。もはや、軍師としての記憶しかないフォルケン。だが、時々弟のバァンのことだけは思い出せるようになる。弟が王国を継いだということを思い、バァンの邪魔をするフォルケン。だが、ついにバァンの側につくことを由とする。「それでこの世界が変わるのなら・・・・。」最後の時、フォルケンの元にエリーズが訪れる。エリーズ「みんな忘れておしまいになったの。」エリーズの涙の瞳を見つめているうちに、フォルケンは記憶を取り戻す。ひしと抱き合う二人。だが黒い翼になっているフォルケンには、もう未来はないのだ。ドルンカークの魔の手は迫っていた。バァンを助けるために、墜落して死亡するフォルケ

ン。だがその時、ドルンカークの運命の装置が回転し、フォルケンは別時空まで飛ばされる。「私は助かったのか・・・・。」月の照らす海岸に打ち上げられて、起き上がるフォルケン。その翼は、再び白くなっていた。彼はこれからまた長い旅を続けて、王国に帰還するのだ。

うーん、こんな感じだったはずです。テレビシリーズの細かい設定とか忘れているんで・・・。最後はしかし、こうなるというか。これもすごい楽な話ですね。こういうの、よく童話とかであるじゃないですか。いい事をしたら呪いが解けるというやつですから、ありがちなお話です。ええ。まあ駄作といえば駄作のうちに入るかなあ。紂王のなんかは、われながらよく考えていると思うんですけど。トルーパーのとかもね。今やってる蒼紫のなんかも、そうですね。まあこれは、フォルケンが恋らしい恋もなく死んでいるんで、生きててほしかったということで考えたというだけの話です。最後の時、エリーズとのセックスシーンは、いちおうこれはなしという方向になっています。そんな事している場合じゃないところで会っていますから。国に帰ってから、存分にやってくださいという事です。最初の出会いで、階段から落ちる少女のエリーズを、白い翼を出して助ける青年のフォルケンが、まあ私としては書きたい場面でしたね。もう書きませんが。

ラーゼフォン　新しい歌

ママン「これはムーリアンの新しい歌ね。これを綾人に歌わせるわ。」綾人「母さんはそんな危険なものを・・・。」悩む綾人。「いやだ、歌わないからな。僕は」ママン「あなたは何

を言ってるのよ。」綾人のほおをぶつママン。そこでコーヒーポッドがこぼれるといいかもしんない。紆余曲折の末、ママンは「やっぱりこの歌は女の子に歌わせるわ。」と言い出す。紆余曲折の末、「二重奏がいいわね。」と言う。「なんて女なんだ」という声が聞こえる中で、巨大化した麗華と久遠の霊が見守る中、綾人は地球各地から歌におびきよせられたドーレムの塊りに、ダイダロス・アタックをかける。遥香は歌を聴いたとたん、苦しんだ末に身長が縮みだして、三嶋麗華の姿に変わる。綾人も生きているのかどうかわからないが、最終的には生きていた。後日談。死んだママンのことを新聞記者から聞く綾人。ママンの若い頃の写真が出てくる。麗華に似ている。ママンの霊が綾人に言う。「だってあなたは朝比奈さんばかり見てたから・・・遥香を一目見てわかったわ。あの娘はママンの若い頃にそっくり・・・。」綾人「ママン・・・。」綾人は麗華を描いた絵を海に流す。麗華「それでいいの？」綾人「うん。きっと母さんは、わかってくれるよ。あの絵は、ムー大陸に行くのかな。」

ーーーー完--------

だからムーリアンが異星人だったね、って設定ですけど

それがうやむやのうちに終ってたから・・・・そうだね。うん。大陸移動説ですね。昔父がヘンな文庫本持ってたんですよ。地球空洞説とか、マヤの古代遺跡とか、ストーンヘンジがどうの、とか書いている本。ああ、あの本ね。知ってますよ。ＳＦファンの間では聖典というか、バイブルですよ。だから地球が空洞になりかかって？ダイダロスアタックの場面で。あー

それいいですねぇ。地球の地軸というか、北極か南極のあたりに空洞ができるんですよ。そうそれ。オゾンホールが？いや電磁波のほうがいいなあ。そうだね。なんかそんな現象がいっしょに起きるといいかも知れないですね。「エヴァ」そっくりになりますけど。いやあれは箱根の山の上だから。そうですね。うん。いいと思いますよ。地球の磁力線の方向にドーレムが導かれるんでしょ？そうだね。いいなあ。今すぐやれ。無理だよ。あれもう終ってますから。うぇーん、僕がバカでした。出淵です。なんで〇〇さんは、正解を知っているのに教えないんですかー！！！僕が最後こういう風にまとめてみました、って言ったら、バカ！！！って口汚くののしるだけなんです。なんでそうなの？アニメって・・・。

ガンダムWテレビ版

　あらすじ→ヒイロ・ユイは天才的技術を持つパイロットであった。彼は幼い頃テキサスコロニーのような地方のコロニーで生まれた捨て子であった。「この子が幸福に育ちますように」ということで、その地方でしか産出しないペンダントをそっと入れられた篭の中で泣いていたところを、L!コロニーの暗殺集団の者に拾われたのである。ヒイロは暗殺者養成学校で、育てられ、一度脱走して故郷のコロニーを見に行ったが、そこには廃墟しかなかった。帰ってきたヒイロは牢獄に閉じ込められる。「今度やったら銃殺だからな」ヒイロは反抗的な目で無言でしばられたまま、男をにらみつけていた。

　その頃コロニー連合は、地球連合に対してオペレーションメテオを発動し、ヒイロはガンダム一号機に乗り込んで、宿敵ミ

リアルドとはじめて対峙する。ガンダム一号機には、コロニー指導者側が執念の思いで開発したガンダニュゥム合金が塗装されていた。これでコロニーと地球を自由に往復できるという、特殊金属なのである。しかし、まだ完全なものではなかった。そのために、大気圏突入でもミリアルドのモビルスーツから逃れたヒイロの一号機であったが、砂漠に墜落したときに機体は大破こそしなかったものの、制御系がいかれた状態で戦うことになる。リリーナとの学園でのはじめての出会い、ヒイロは地球連合側の人間だということで、「おまえを殺す」とささやく。とまどうリリーナ。リリーナには出生の秘密があった。父はその秘密を、童話「星の王子様」の本の裏側に、手紙で隠していた。

　はじめての学園パーティで、別の生徒と踊るリリーナ。その時ザクの部隊が空襲し、パーティ会場は阿鼻叫喚の渦になる。地球連合のトレーズのしわざである。空襲警報のひびく中、我が家にかけつけたリリーナは、母の死に直面する。「あなたは私たちの子供ではないの・・・書斎にある本にそのことが書いてあります・・・。」「お母さま、もう何も言わないで」いまわのきわにそう言う母の言葉に、リリーナは涙ながらにうなずくのだった。その頃ヒイロはたった一機の動かないガンダムで、ザクの部隊と砂漠で苦戦していたところに、デュオがサリイ・ポォと現れる。合流する予定だった隠密部隊である。やがて、デュオ以外の仲間とも合流するのだが、ポォのもとに本部から指令が伝えられる。ノベンタ将軍という、辺境の部隊の指令長官を殺害するように言われる。ボォ「おかしいわね。なぜあんな老人を殺さなければならないの？」本部に不信感を抱く

ボォであったが、ヒイロは嫌な予感のまま、ノベンタ将軍が乗る移動飛行艇を攻撃する。実はノベンタは有能な軍人であり、トレーズは邪魔に思っていたのだ。ノベンタ将軍の死は、大々的にニュースで伝えられず、事故という扱いで終わるが、その頃ヒイロの故郷であるコロニーの回転軸がはずれて、自爆してしまう。トップニュースでそのことを知り、愕然とするヒイロ。もう家族は死んだのかも知れない。コロニーの回転軸をはずしたのは、トレーズのしわざであった。

ヒイロはトロワと一緒に、ノベンタ将軍の家族に会いに行く。「オレはテキサスコロニーの人間だ。」「テキサスコロニーの人間？」少女の顔が涙でゆがむ。「戦争ってみにくい殺しあいよね。あなたはどうして、おじいちゃんを殺したの？そんなことしているから、あなたの故郷だってなくなるのよ！」「

そう思うなら、オレを撃て。」「できないわよ、そんなこと。もう帰りなさいよ！」ヒイロはトロワに「女に泣かれた。」と言う。トロワは「オレは女にぶたれた。」と苦笑する。

その後紆余曲折があり、トレーズはヒイロに殺されてしまう。「私は歴史の一行目、二行目を書いた、今度は君が三行目を書く番だ。君も歴史的な犯罪者の一員になりたまえ。」「悪いがでは、そうさせてもらう。」トレーズの乗るモビルスーツを破壊するヒイロ。しかし「トレーズ、君はそこまでの人間だ。しかし私は最後までやりとげる。」ミリアルドが新たな敵となって、ヒイロの前にたちはだかる。ミリアルドはコロニー

を地球に降下させ、自分も一緒についてモビルスーツで降りていく。コロニーをはさんで、ヒイロとミリアルドの激戦が展開される。ミリアルドの機体には、ガンダニュゥム合金を明らかに上回る装備が配備されている。ヒイロの機体は、古い機体なので、激しい操縦で燃え尽きる寸前である。ビームライフルで雨のようにミリアルドに連射されながら、ヒイロはコロニーが自動的に分裂するポイントの秘孔を突く。その瞬間、ヒイロの機体がバラバラになる。地上のリリーナは、映りの悪い古いテレビで、権力への抵抗者の者たちと一緒にその映像を見る。「今緊急ニュースが入りました。コロニーが分裂していきます。コロニーが砂漠の上に落下します。コロニーは、われわれの上には落ちません。」「落ちたの？」リリーナは砂漠に雨のように降り注ぐ、隕石の群れを目撃する。

まあねー、途中いっぱいはしょってますから、「あんたそれ、ただのウルトラマンじゃん」と言われると思うけど、そうしないと落ち着かないので、書きましたです。だからあれはそうなってないでしょ。もう「あしたのジョー」でもなんでもいいですけどね。最後死んでるかも知れないし、ヒイロ。

「その機体では三分間と持たんじゃろう。コロニーは落下でものすごい高温になっとる。近づくだけで、とけてしまうぞ。」とか、きちがい博士らに言われながら出撃、という設定ですし。ああ～ガンダム～オレのガンダム～オレのガンダムはしかし、こうなんだ。だからなんだあれは。追い詰めちゃいけないのか、これ以上。

渡辺淳一「無影燈」改編案

　あらすじ→小さな外科病院の雇われ天才医師直江は余命いくばくもないガンで苦しんでいた。そこの院長はカルテ改ざんを直江に命じていて、直江はそのことで、院長を憎んでいた。しかし弱みを握られていて、その病院から移動できずに看護婦の倫子（仮名）と関係していた。「先生、私アレがないの」「そうか」無言で寝床でタバクを吸っている直江。倫子の心は不安になる。倫子は直江との結婚を言い出せないでいるのだった。

　院長夫婦には高慢だが奥手のお嬢さんの一人娘がいた。大手薬品会社の息子との縁談の話が決まっていた。これで病院を大きなものにできると、皮算用をしている夫婦だったが、直江はこの令嬢を誘惑する。お見合いの日にホテルに一人で来い、それが大人の女というものだという誘い方をして、令嬢はビジネスホテルに駆けつけるのだが、直江は令嬢の服を破いてレイプ寸前のところで放り出し、「じゃあな」とホテルのドアを閉めて行ってしまう。令嬢の心に直江への憎しみがわきあがる。「おとうさん、私あの人にレイプされたの。私のおなかにはあの人の赤ちゃんが・・・」怒り狂う院長。「貴様は首だ。貴様がうちの病院のモルヒネをくすねていたのは、わかっていたんだ。のたれ死ぬがいい。」「オレがいないと、治せる患者も治せないぞ。」「貴様の代わりはいくらでもいる。」モルヒネを奪われて、路上に突き出される直江。その日、その病院では患者が一人医療ミスで死んだ。

　直江は痛む体のままで、旅館に倫子を呼び出し、鎮痛剤なしでセックスをする。激しい行為のあと、倫子は直江の体が硬直して自分の上で動かないことに気づく。腹上死である。ガンは直江の命をついにうばったのだ。「いやーっ。」驚愕して大声

で叫ぶ倫子。「お願いです。助けてください。誰か助けてください。」ガウン姿のまま、電話を救急病院にかける倫子。羞恥心で気が動転し、心臓マッサージもできなかったのだ。そのことが生涯倫子の心を苦しめることになる。

病院を解雇された倫子のアパートに、速達が届いた。「君が孕むことを祈っている。」倫子は手紙を読んで、涙を流しながらシャワーを浴びるが、不意に異変を感じる。腹部に激痛が起こり、膣から血が流れ始める。流産である。ああ、あの人の子供は産まれないんだ・・・倫子はシャワールームでうずくまって嗚咽する。転勤した新しい外科病院の手術台の照明を、倫子はつける。その明かりが、倫子には直江が吸っていたタバコの火に見える。倫子は目を開いていられず、うつむいてうずくまる。

アニメ改変案集 1

著　　者：おだまきかこ

印刷・製本：欧文印刷株式会社
http://www.obun.jp/

bunest
mybooks.jp

goo
www.goo.ne.jp

200801240073-033-000000

背表紙は左のようになります。
半角英数字を使用している場合は半角英数字だけ90度回転した状態になります。
なお製本サービスをご利用の場合、総ページ数が一定のページ数（120～140ページ前後）に達しない場合は背表紙に文字は入りません。ご承知おきください。

アニメ改変案集1

おだまきかこ

英数字が90度回転しないようにするには....

お申し込み画面の「書籍のタイトル」と「著者名」を入力するときに全角文字で入力してください。

<英数字を半角で入力した場合>

子育て日記 VOL. 2

▼

子育て日記 VOL. 2

<英数字を全角で入力した場合>

子育て日記 ＶＯＬ．２

▼

子育て日記 ＶＯＬ．２